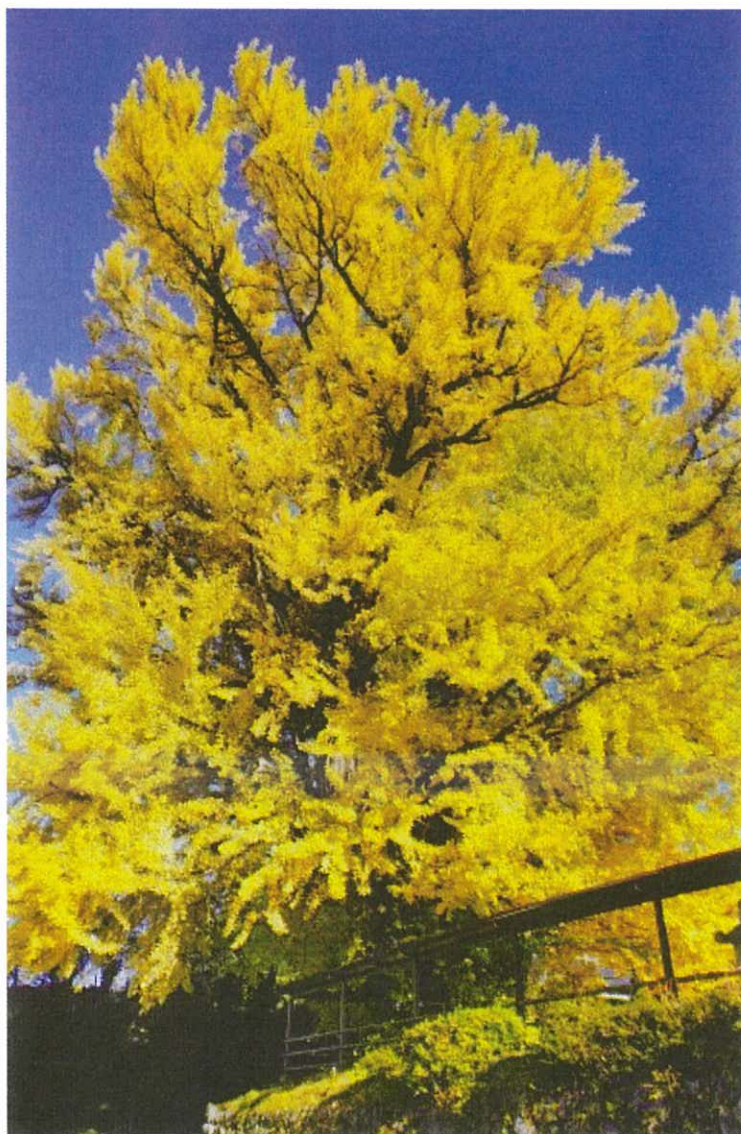


# 阿木の縦糸 横糸

—生活文化集—



阿木長楽寺の大イチョウ

中津川市文化遺産活用実行委員会  
(阿木地域伝統文化継承事業実行委員会)



令和元年度文化芸術振興費補助金 (地域文化財総合活用推進事業)

# 目 次

---

はじめに	1
<b>1章 町の移り変わり</b>	
1節 阿木の中心街	2
(1) 無くなった店・職人等	3
(2) 数が減った店・職人等	3
(3) 新たな店等	3
2節 阿木の交通	
(1) 街道から県道・国道へ	4
(2) 明知鉄道	5
(3) 交通網の完成	6
3節 電気	7
4節 水道	7
5節 下水	8
6節 電話通信	9
7節 学校	9
<b>2章 農業の歩み</b>	
1節 農業の歩み	12
2節 野内の用水（新井）	14
3節 その他の阿木の主な用水	16
4節 おかいこ様	17
<b>3章 歴史（抄）</b>	
1節 縄文、弥生遺跡の発掘	18
2節 戦い	19
3節 城主と領主	19
4節 焼かれた塞神神社	20
5節 阿木騒動	21
6節 地下軍需工場	22
<b>4章 大災害</b>	
1節 元亀元年、大野村全滅	23
2節 宝永元年、血洗いの池埋まる	23
3節 150年来の大洪水	23
4節 コンクリート橋が語る大洪水	23
5節 伊勢湾台風他近年の災害	25
<b>5章 暮らし</b>	
1節 食	26
2節 住居	28

3節	阿木の行事		
	(1) 年末行事	.....	31
	(2) 正月行事	.....	31
	(3) 若木むかえと御日待	.....	32
	(4) 十五日正月	.....	32
	(5) 節分	.....	33
	(6) 賦せん	.....	33
	(7) ひなまつり	.....	34
	(8) まつり	.....	34
	(9) 男の節句	.....	34
	(10) お茶番	.....	35
	(11) お盆	.....	35
4節	安岐座	.....	35
5節	公会堂と秋葉様	.....	36
6節	阿木劇場	.....	37
7節	結婚式		
	(1) 昭和6年(1931)に17歳で阿木に嫁いできた女性のこと	.....	37
	(2) 終戦直後に結婚した女性のこと	.....	38
	(3) 昭和35年(1960)に見合い結婚をした人	.....	38
	(4) 生活改善運動の頃の結婚式	.....	38
	(5) 新しい時代の結婚式	.....	39
8節	葬式	.....	39
<b>6章 信仰</b>			
1節	阿木の民間信仰		
	(1) 阿木の民間信仰	.....	41
	(2) 野内の念仏堂(薬師堂)	.....	41
	(3) 藤上の念仏堂(弘法堂)	.....	43
	(4) その他	.....	43
2節	たたり	.....	44
3節	五輪塔	.....	44
<b>7章 阿木の伝説とこぼればなし</b>			
1節	阿木全体	.....	46
2節	1分団	.....	48
3節	2分団	.....	51
4節	3分団	.....	54
5節	4分団	.....	55
6節	5分団	.....	56
7節	6分団	.....	57
参考文献		.....	58
あとがき		.....	59



## はじめに

---

一昨年度の「阿木の文化遺産」、昨年度の「あぎ郷土かるた」に続き、本年度は「阿木の縦糸横糸―生活文化集―」をまとめるため、阿木地域伝統文化継承事業実行委員会において検討を重ねてきました。

令和元年（2019）10月初旬に最大最強といわれる台風19号がもうすぐ上陸すると報じられたときに、昭和34年（1959）に発生した伊勢湾台風のことを近所の人に聞いたら、当時のことを覚えている方がほとんどみえませんでした。その頃は家庭でサッシ戸は使われていなかったもので、部屋の中に強いすきま風が入ってきて相当に怖かっただろうと思われそうですが、人々の記憶に残っていないことに驚きました。60年前のことです。この間、冠婚葬祭が家庭で行われなくなって、生活のテンポが速くなり、忘れられることが多くなったようです。

これでは100年、200年前の伝え話は忘れられているのは当たり前だと考え、生活の歴史に焦点を当てました。厳密には伝説と言えないかもしれませんが、昔の阿木の生活の知恵・習慣を忘れられないようにとの願いを込めて、阿木の生活における文化としてまとめました。

昔はこんな生活だった、こんなことがあったと家庭での話の種にしていただけでも幸いです。

阿木地域伝統文化継承事業実行委員会

委員長 本多 敬穂

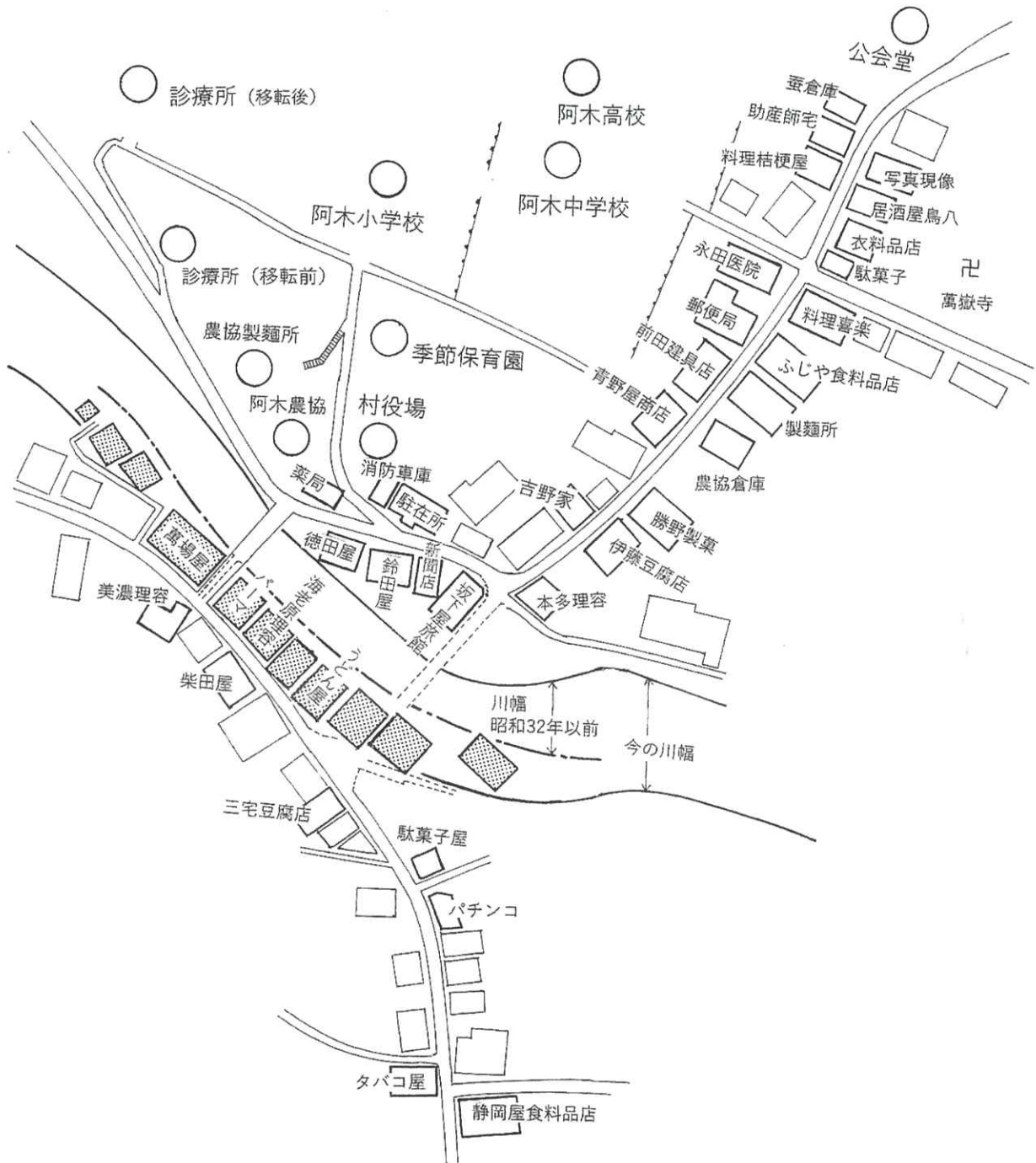



# 1章 町の移り変わり

## 1節 阿木の中心街

昭和30年(1955)頃の阿木の中心街

(昭和32年(1957)の台風5号被害の前の街並み。記憶に基づくイメージ図です。)



 は昭和32年の台風で流失または川幅を広げたため移転した家

(1) 無くなった職人・店等 《昭和30年(1955)頃はあったが今はないもの》

鍛冶屋<sup>かじや</sup> こうじや 石屋 畳屋 紙すき<sup>おけや</sup> 桶屋 綿打ち 竹細工 自転車店 旅館<sup>はたご</sup>(旅籠)  
豆腐屋 和菓子製造 荒物 日用雑貨 本屋 下駄屋 医院 産婆<sup>さんば</sup> 薬局 祈祷師<sup>きとうし</sup>  
パチンコ店<sup>とや</sup> 鳥屋 居酒屋 写真屋 うどん屋 養蚕 養鶏 養豚 酪農 下駄工場  
寒天工場 製麺所<sup>ばくろ</sup> 馬喰 牛乳配達 アイスキャンデー売り 映画呼び込み  
牛や馬を使って材木搬出 木こり 日通 電気器具店

明治の時代までは酒造業を営んでいる家もあった。宮田の安藤さん宅は庄屋のかたわら酒造業をやっていて、今でも安藤さん宅を「酒屋」と呼ぶ。また、寺領の本多敬穂さん宅も明治の中頃まで酒造業をしていた。

(2) 数が減った職人・店等 《昭和30年(1955)頃と比べて》

製材所(4軒→1軒) 左官(現在1人) シクラメン生産農家(7軒→2軒)  
炭焼き 生鮮食料品店(10軒→2軒) 衣料品店(3軒→1軒)

衣料品については各家を訪問して販売する行商があったが今はない

(3) 新たな店等 《昭和30年(1955)頃と比べて》

喫茶店 カラオケ店 自動車販売修理 老人福祉施設 民宿 クリーニング取扱店  
機械繊維等製造下請け工場 A-COOP 水道屋 ガソリンスタンド 水耕栽培の野菜生産  
パン屋 木工所 トマト生産 宅内電気配線業 パターゴルフ場 安岐そば提供の店  
ゴルフ場 野菜トマト等無人販売所 ライスセンター 農機具センター

かつては農家ばかりか村自体も自給自足の暮らしだった。阿木においても生活に必要な品は、村内に生産者や職人がいて、ほぼ村内でまかなうことができた。

暮らしぶりが「近代阿木」に大きく変わるきっかけとなったのは、大正7年(1918)の送電開始、大正12年(1923)から昭和8年(1933)前後にかけて行われた県道阿木大井岩村線の拡幅、昭和8年(1933)の明知線の開通と考えられる。

続いて大きな変化は昭和35年(1960)すぎになる。高度成長にともなって専業農家がサラリーマンになり、各家の収入が増え、マイカーや洗濯機などの家電製品が普及した。

その次が平成2年(1990年)の阿木川ダム建設などに伴う国道363号線と農道等道路の二車線化、水道・下水の普及と考えていいのではないか。

自給自足の暮らしは大きく変わり、阿木の業者の多くが廃業することとなった一方、今日の新しい生活が生まれた。

## 2節 阿木の交通

### (1) 街道から県道・国道へ

大井から東野・飯沼・阿木に繋がる街道を「大井街道」といい、橋場には阿木川に架かる立派な木橋があり、そのふもとから川下を「青野街道（横吹道）」といていた。寺領方面から阿木川を渡り左に折れると登り坂があり、その坂が「羽根坂」である。若王子神社・塞の神・打杭峠を越えて岩村に繋がっている街道を「岩村街道」と阿木の人々は言っていた。

また中津川から川上・龍泉寺の峠を越えて・広岡・阿木に繋がるのが「美山街道」である。

大井街道は、大正12年（1923）に道路改良をした。初めてレールを敷いたトロッコを使い、土や石を運ぶ工事を行った。これが県道阿木・大井線となって、飯沼の乱れ橋（現在の後田川に架かる下沢橋）まで大井から車が通れるようになった。しかし、そこから先は急坂続きである。乱れ橋を渡ると外戸尻坂があり、飯沼のお子安さん（神明神社・子安観音）へとつづいている。

特に難所だったのは野内赤坂地内である。野内にさしかかるといったん谷底に降り、そこから野内共同墓地まで上がる。高低差も大きく、地面もぬかるみのため、「『野内赤坂道悪し、馬でも滑る』とって小馬鹿にされたもんだ」と地元の人はいう。その野内赤坂を過ぎると小皿田に「秋葉坂」とか「そんで坂」とっていた坂があり、下ると寺川になる。渡ったところに阿木公会堂（現在の保育園）・萬嶽寺がある。さらに寺領の道筋を進むと小中高校・役場・駐在所・農協等が集まる阿木の中心地に至る。

大井街道や岩村街道は主要道にもかかわらず、道幅は狭く急坂やぬかるみが多くある街道だったので大がかりな道路改良をすることになった。特に急坂である飯沼の垣外尻坂や黒田の打杭峠などは大きく迂回し、野内赤坂では掘割工事を行った。そうした工事で阿木の中をバスや大きなトラックが通れるようになったのである。工事は、岩村街道も含めて昭和3年（1928）から始まり昭和8年（1933）に完成した。

現在の道はそれから更に改良をかさね、国道363号線は中津川から広岡・寺領の交差点・黒田・岩村へと繋がっていく。県道阿木・大井線は飯沼バイパスができ寺領の交差点へと繋がり、飯沼から広岡には二車線の農道もできた。寺領から八屋砥を通り、飯羽間・野田を通り大井に繋がっており随分便利になったものである。

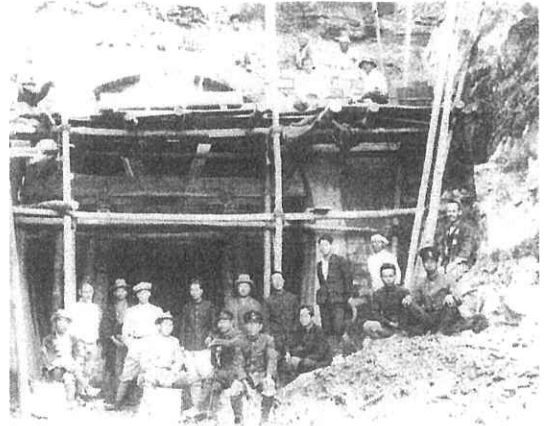


## (2) 明知鉄道

国鉄明知線は明治29年(1896)以来長い運動がようやく実を結んで、昭和9年(1934)明智まで全線開通している。昭和4年(1929)測量が始まり、その当時は静岡県掛川までつなぐ計画があった。宮田トンネルの工事は昭和6年(1931)に着工。つるはしやトロッコを使い栈橋をかける大変な工事であった。

「野田とぶんのくそ(首の後)は見とうても見えん。」と言われていたが、トンネルが開通した時は「野田が見えた、野田が見えた。」と大騒ぎだった。阿木川に架かる宮田鉄橋工事は松の太いのを数十本打ち込む工事だったが、地づき歌を歌いながらやったものである。

昭和8年(1933)5月24日に大井から阿木の区間が開通した。開通を祝って大井町では朝から花火を打ち上げた。一番列車を迎える阿木駅では万国旗が揚げられ、村民・小中学生が日の丸の小旗を振るなど、村中が駅前を埋めつくし熱気であふれていた。汽笛を鳴らし一番列車が到着するや、人々は「大きいな」「ぴかぴかだな」と驚いた。夜には、阿木公会堂で祝賀会(地歌舞伎を上演)が行われるなど村を挙げての大祝賀行事となった。



▲宮田トンネル工事(中津川市・昭和6年頃)  
視察官訪問のおりに、『阿木写真集』より。



▲開業に沸く阿木駅



▲開業列車を待つ阿木駅

▲開業列車の到着を待つ阿木駅(中津川市・昭和8年5月24日) 子どもを背負った女性も身を乗り出すように列車の到着を待つ。



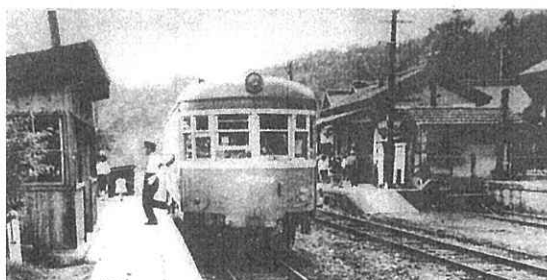
▲道床の土盛り工事(中津川市・昭和8年頃) 八屋敷地内にて。中央を走る線路は工事列車専用敷設された仮の線路と思われる。

▲久須田工事

阿木駅に隣接させて阿木村農業倉庫（米や炭俵貯蔵）も完成し、駅前には日通の事務所とトラックも配備された。日通は昭和30年（1955）頃まで開業していた。明知線は当初蒸気機関車で、今の飯沼駅付近は特に急勾配のため速度も遅くなり、近くの人はいざいといと飛び降りて家に帰った、との逸話も残っている。

また開業して間もなく飯沼トンネル近くで落盤らくばんがおき、線路が浮き上がる事故があった。「開業したばかりなのに廃線になると大変」というので、飯沼の人達が総出で復旧作業をして翌日無事に一番列車を通過させた。また飯沼トンネルは、湧水が激しく難工事だったため、トンネルのコンクリートがきれいに打ち切れず段差がついている。

乗客列車は昭和32年（1957）に蒸気機関車からレールバス（ディーゼル車）になり、昭和48年（1973）までは貨物列車だけが蒸気機関車となった。昭和60年（1985）には第三セクターの明知鉄道に生まれ変わり現在に至っている。



▲ディーゼル車の登場

### (3) 交通網の完成

以上、道路と鉄道との二つの交通網の完成が、その後の阿木を大きく変えていくきっかけになった。

それ以前は、名古屋に行くときなどは、大井駅（現在の恵那駅）まで徒歩で行くか、岩村電気軌道（明治39年（1906）岩村・大井間開通）の電車に乗って大井駅まで行っていた。

阿木の人がこの電車に乗るには、八屋碓を通り飯羽間の山王駅さんのおう（今の国道257号線がぶつかる交差点付近にあった）か、小沢駅まで行った。小沢駅は今の阿木川ダムにかかる大橋の下にあったから、青野を通り阿木川を丸太橋で渡った所である。そこから大井駅まで行って、中央線（明治35年（1902）名古屋・中津川間開通）に乗っていかざるを得ず、ずいぶん時間がかかっていた。



▲阿木川の木材川流し搬出

また木材は阿木川を使って流し、炭や焚き木・繭まゆ・米・味噌・野菜などは馬車か荷駄あるいは荷車などで運んでいた。

それが大井街道の改修や国鉄明知線の開通でトラック・バスや汽車で輸送できるようになり飛躍的に効率が高まり、たいへん便利になった。人の



交流も盛んになって、他町村との結婚も多くなった。このことにより阿木の生活様式も随分変わっていった。

### 3節 電気

「大正7年(1918)阿木電機KK送電開始、広岡は8年」と「ふる里の今と昔、阿木の写真集」に載っている。

水は阿木川から取り入れ、沈砂池を通し、今の本多電機倉庫近くの発電所まで送った。沈砂池は「電気淵」と呼ばれて、水泳など子どもの格好の遊び場だった。

初めて電気が来た瞬間のことが、八屋砥の西尾ちかさん(明治29年(1896)生)の自叙伝「年輪」(平成2年(1990)発刊)に書いてあるので以下引用。

「わが家では近所の寄り合いをしていました。その最中突然『パッ』と明るくなりました。電気が来たのです。その明るかったこと…。集まっていた人達は、自分の家にも来たか確かめるため席を立てて行きました。『来とった来とった、明るかった』」

今から思えば20~30ワットの電球の明るさだったが、それまで使っていたカンテラと比べれば「大違いで明るかった」といわれる。だが発電量が小さいため「電球は一家に一つ」と決められていた。そのためコードを長くして、食事時は台所、食後は居間などと、明かりが必要な部屋に電球を動かしていたという。

昭和8年(1934)に阿木電機KKは村営となり、昭和17年(1942)には中部配電KKに譲渡され、各家庭や職場で必要な電気が十分使えるようになった。

### 4節 水道

明治から大正・昭和初期にかけての話だが、その頃は「もらい湯」というのがあったそう。今日は風呂を沸かいたでおいで」などと誘われて、はいりに行ったという。どの家も風呂は毎日沸かすものではなかった。

その大きな理由は、水が今みたいにふんだんに使えなかったことと、マキを使うことを節約したためだ。

昔から水は井戸か、井戸のない家は近くの山からとい樋で引いて使っていた。井戸水は冬には枯れることがある。そんな時は川へ行き、薄氷を割っておけ桶やバケツに水を汲み、何往復もして風呂や洗濯に使った。寒い中、しもやけやあかぎれの手でやるのは辛かったという。

だからうっかり風呂を沸かしすぎて熱くすると、改めて水を汲んできてうめなきゃなら



んし、マキも余分にいるから、きつく叱られたものだ。

また暮らしぶりも洗い物を増やさないう、食後の茶碗は各自がお茶を注いで洗って膳ぜん箱はこに納めたし、脂分の多いサンマなどはハウバを拾ってきて皿代わりにし、食べ終わると囲炉裏で焼いて処分したものだ。

用水も鍋のコゲ取りなど下洗いなどに利用したから、下流の家のことを思って「汚いものは流すな」と言われていた。「自宅で葬式を出した時、水をたくさん使ったので井戸水が枯れて出なくなった。隣からもらい水をした」ということもあった。

平成6年(1994)は大規模な水不足の年だった。飯沼はまだ水道がなかったため、軽トラにポリタンクをいくつも乗せて、水を確保しに中の島公園などに何度も通った家があった。

長い阿木の歴史の中で、やっと水不足や水汲みから解放されて、居ながらにしてふんだんに使えるようになったのは、簡易水道ができてからだ。阿木の簡易水道は昭和58年(1983)から順次使えるようになり、全域で使うようになったのは昭和61年(1986)のこと。飯沼は平成11年(1999)から全域で使えるようになった。

水道が通った時、若い主婦が「これで安心して全自動洗濯機が使える」と言って喜んだ。

## 5節 下水

平成14年(2002)に阿木保育園のトイレが合併浄化槽になった。待望の水洗化。それまでは昔ながらのポットン便所だったため、合併浄化槽や簡易水洗トイレがすでにある家の子から「保育園の便所は臭いし怖くて使えん。家へ帰るまで我慢する。」と、切実な声が出ていた。また「遠くで暮らす孫が『おじいちゃんの家は便所が臭いし外にある』と言って来たがらない。」と悲しむ声もあった。

こうした声に押されて平成19年(2007)に、宮田の阿木川河畔に「若あゆの里」と名付けた農業集落排水の終末処理場が稼働した。阿木の暮らしを時代に合わせて大きく変える事業だった。

下水ができる前は、阿木の多くの農家の便所は外にあった。夜は暗くて子どもは怖がり、匂いもきつかったが、野良仕事の途中でも簡単に用が足せて都合がよかった。

小便所はカメを埋め込んで作ってあり、昭和30年(1955)くらいまでだったろうか、女の方はカメにお尻を向け、着物の裾を腰までまくり上げて中腰で用をたしたものだ。また大便所はざらざらした紙があればいいほうで、新聞紙などでお尻をふいたものだった。

## 6節 電話通信

阿木村役場に電話が初めて入ったのは大正11年(1922)のこと。14年後の昭和11年(1936)には12戸に設置されている。

その後、647戸が加入して有線放送が昭和36年(1961)に開局した。開局当初は阿木農協の建物の二階を事務所兼交換所とし、交換手が電話をつないでいた。集落ごとに一回線だったため、同じ集落なら別の家にかかった電話でも会話を聞くことができた。開局当初は声が電話線を伝わってくるということがきわめてもの珍しく、いけないこととは知りながら、耳をそばだてる人がけっこういた。

どの家にも固定電話がおかれるようになったのは、阿木では昭和43年(1973)頃とみられる。普及し始めの頃はまだダイヤル式の黒電話器だった。

その後、平成の時代を迎えたころから急速に携帯電話とパソコンが普及し、今では動画も見えるようになった。

## 7節 学校

はじめに阿木の公教育の歴史を追ってみる。

明治6年(1873)	阿木村に <sup>けいちょうぎこう</sup> 稽徴義校を開設	飯沼村に <sup>しんぶうじゅく</sup> 新風塾を開設
明治10年(1877)	小学校と改称	同年広岡に分校作る
明治19年(1886)	小学校が尋常小学校と高等小学校の二級となる	
明治30年(1897)	阿木と飯沼の合併により阿木尋常小学校となる	
昭和16年(1941)	阿木国民学校と改称・補修学校は青年学校に、兵隊帰りの人が 教官となり軍事教育が行われる	
昭和22年(1947)	阿木小学校と改称、中学校が新設され義務教育9年となる	
昭和24年(1949)	阿木村立阿木高校(定時制)開設	
昭和24年(1949)	中学校新校舎落成(現在の阿木高校敷地に立地)	
//	村立阿木高校、旧青年学校校舎で開校	
昭和26年(1951)	村立阿木高校、新校舎完成(旧阿木中裏)	
昭和37年(1962)	広岡分校阿木小に統合	
昭和39年(1964)	小学校新校舎できる	
昭和43年(1968)	阿木保育園認可される(現在の振興センター付近で保育開始)	
昭和58年(1983)	阿木保育園(公会堂跡地)・阿木中学校新築完成	

大まかな流れは以上のようになる。伝わっている話を以下に。



江戸時代の文政期(1818年～)以降明治初期の間、寺子屋をしていたという記録があるのは伊藤金右衛門(大野)、吉村弥兵衛(飯沼)、吉村仙治(飯沼)、宮地元碩(橋本)、安藤又兵衛(宮田)、茲延(長楽寺)、金牛(萬嶽寺)である。

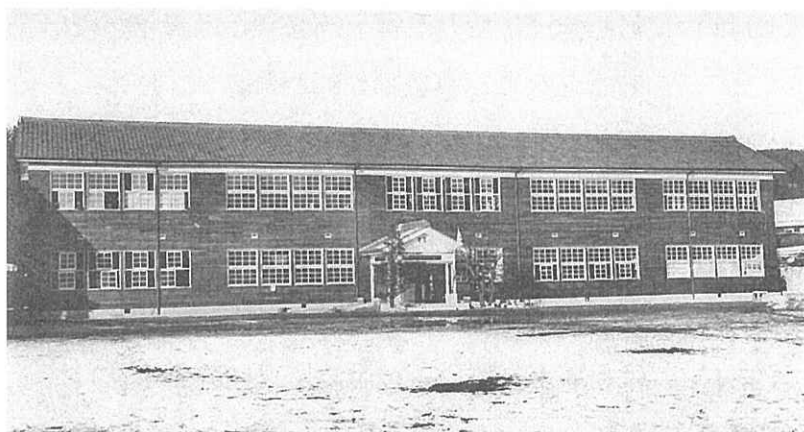
明治期には家の仕事の手伝いをするため、登校できない子がいた。家の仕事が忙しいので、幼い弟や妹を背負って登校した時代が昭和初期のころまでであった。

戦争中はもちろんその後もしばらくの間、先生によく殴られた。ゲンコツやムチでやられたし、チョークが飛んでくることもあった。戦後何年かして同級会でよお殴った恩師を招待したら、先生はあいさつで、開口一番「昔の話は時効やぞ」と言われた。

阿木高校は村が作った。創立当初は農業科と被服科を設置し、国の緊急課題だった食糧増産と生活に欠かせない裁縫を女性に教えることを目的に、昼間の定時制として発足した。村の今後の発展は農業振興と裁縫にあるという考え方がうかがわれる。高校を村が作るという例は近辺にはなく、きわめて大きな村の熱意が感じられる。

小学校では農繁休暇があり、子どもは大事な働き手として田植えや稲刈りの手伝いをした。休暇期間は一週間だったが、その後機械の普及とともに短くなり、なくなったのは昭和45年(1970)あたりだっただろう。

今の阿木小学校を作るにあたって、整地作業は自衛隊が行った。見たこともないような大きなトラックやブルドーザーがうなりをあげて何台も動いていて、大人も子どもも遠くからもの珍しく期待を胸に眺めた。



▲阿木中学校新築

今の阿木小学校が新築された年、新中学一年の子たちが小学校の前を通るたび、毎朝「先生の嘘つき」と大声で叫んでいた。理由はその子らが6年生の時、「新しい学校が出来たら呼んでやるって約束したのにちょっともしてくれん」ということだった。そこで小学校は改めて、新中学一年全員を新校舎に招待し、校舎の中を案内したものだ。



飯沼と広岡を結ぶ現在の農道が、飯沼川と交差する橋の西側に分校があった。分校は下広岡以外の広岡地区と飯沼新田の1・2年生の生徒が対象で、1クラスの複式学級だった。対象地区でも1年生から本校入学を選択するケースがあった。3年生になると本校に通った。分校と本校の生徒は年に何度か交流をしていたから、スムーズに友達になれた。

昭和37年(1962年)、本校と分校が統合。分校は85年の歴史に幕を閉じ、飯沼と広岡の生徒は1年生から本校に通学することになった。

昭和42年(1967)までは、農繁期になると村の青年団が役場の建物で臨時季節保育園を開設し、入学前の子の面倒を見た。昭和43年(1968)に認可保育園になり、正規の保育士(当時は「保母」と呼んだ)が配属された。

秋、半日かけて小学生は、学校行事としていなぎ捕りをした。捕って学校に持寄り、ゆでて販売した。学校図書費やプール建設資金にという名目だった。今から思えば本当に名目通りに使われたかどうか、あやしいものだ。

昭和30年(1960)代のことだ。学校から海水浴場や修学旅行に行ったが、当時はまだ食べる物が不足している時代だったので、生徒は米を宿泊先へ持っていった。

また、昭和30年(1960)代は学校で薪ストーブが使われており、生徒は薪を割り当てられた量だけ学校に届けた。その前は生徒が山へ行って木を運び出し、学校で切りたきものにした。木造校舎の端から端まで薪が高く積み上げられた様子は、冬の風物詩だった。その時代、給食は冬の間だけ味噌汁か豚汁が出た。

## 2章 農業の歩み

### 1節 農業の歩み

牛や馬から耕運機に代えたばかりの人が、耕運機を使って作業をし始めた頃のことだ。あわてて止めようとし、牛や馬に言うように「ドウドウ」と言ったが耕運機は止まらず、ボタから落ちてしまったという。ちなみに牛や馬は止める時は「ドウドウ」、出発は「シッシッ」と声をかけたものだ。

阿木でいつごろから農作業に機械を使い始めたかということだが、耕運機は昭和35年(1960)過ぎからのようだ。「昭和38年(1963)に恵那ディーゼルが真原と飯沼で耕運機の見本運転をした。」と記憶している人がいる。酪農家などではもう2～3年早かった家もあったような気がする。

耕運機を使う前の時代は、牛や馬が大事な働き手だった。牛や馬にスキやマンガと呼ぶ道具を引かせて、田おこしや代かきをした。また、馬の背中に米や草などを乗せて運んだり、荷車や馬車も使っていた。水車小屋もあちこちにあった。

昭和40年(1965)頃までの農家はよなべ仕事(「よーなべ仕事」と言った。)をよくしたものだ。まだ蛍光灯はなく、裸電球の下で真空管のラジオを聞いたりしながら、縫物、縄ない、わら草履づくり、秋は米を俵に詰めたりした。

明治の後期か大正の初めの頃のこと。10歳くらいだった少年時代の話。我が家は小作をしていて貧乏だった。母親が「外米を買ってこい。」と言う。農家でも年貢を払うと食う米が足りない。そこでまずいけど安い外米で腹を満たそうというわけだ。百姓が米を買うなんて、それも外米を買うなんて、子ども心にも恥ずかしくてイヤだったが、叱られて、よその人に見られないよう暗くなるのを待って、一人岩村までトボトボ歩いて行った。打杭は木がうっそうとしていて、いっそう暗く怖かった。

ところが米を入れた袋には穴があいていた。知らないうちに米つぶがポロポロ落ちて、帰った時にはずいぶん少なくなっていた。母親には頭をはたかれるし、みじめだし、あんな悲しいことはなかった。

農業機械というと、最初は足踏み脱穀機だったろうか。「阿木写真集」に昭和35年(1960)と記して、足踏み脱穀機を使っている写真が載っている。また同誌に、昭和30年(1960)代として発動機を使って脱穀している写真もある。



▲昭和30年代 発動機での脱穀



農作業の服装は、男性はもも引やふんどしをはき、頬ほづっぱ、手おいなどをしてきたものが、昭和35年（1960）を過ぎた頃からズボンやシャツ、麦わら帽子などに代わった。女性の場合はモンペ、着物に帯、手おい、手ぬぐいを姉さんかぶりにしている姿が昭和40年（1965）代後半まで続いたようだ。

作業服は自分の家で機織りはたおをして縫ぬったものが中心だった。衣類を買うようになったのも昭和35年（1960）以降だ。それまで手袋はなかったから、農家の大人の手はみな太くて大きく、ひびの入った荒れた手をしていた。

機械が入ってくると農作業のやり方が変わった。家族全員がかかりきりで農作業をしなくてもこなせるようになった。

これにより、農家が共同で助け合う「ゆい」がなくなり、それぞれの家だけでできるようになった。それと専業農家がサラリーマン家庭になり、残された家族が農業をやる兼業農家が増えた。それを「かーちゃん農業」とか、じいちゃん・ばあちゃんを加えた「三ちゃん農業」と呼んだ。

「ゆい」に来てもらった家は夕食を出す。戦後10～15年頃のことだが、「どこへ行ってもサンマ飯ばかり出るもんで食い飽きてしまったものだ。」などと、当時を振り返る人がいる。

農家は田植えが終わると柏餅を作り、稲刈りが終わるとおはぎを作って慰労した。この時のおはぎを「刈上げ餅」と呼んだ。

今のようにトラクターやコンバイン、乗用田植機を使った農業をするようになったのは、圃場整備が完了してからだ。いくつもあった小さな田んぼが、1枚が10アール、20アールの広い田になり風景が大きく変わった。昭和48年（1973）以降のことだ。

昭和50年（1975）には阿木ライスセンターも完成し、脱穀、乾燥や苗を育てることもやってもらえ、ハザ干しやクイとナルの片付け仕事などをしなくてすむようになった。カネはかかるけどウンと楽になったものだ。その一方、圃場整備をした頃から減反・転作政策が始まった。

江戸時代からずっと、鎌、クワ、備中クワ、唐箕とうみ、せんばこきなどが使われていたようだ。唐箕は実と殻とを風を送って分ける木製の道具、せんばこきは金属の歯が何本も出ていて稲束をかぶせて引っ張りモミを落とすものだ。江戸時代以前のことは分らない。



▲唐箕



阿木の開拓史を見ると慶長6年(1601)以降昭和の時代まで、両伝寺・青野・広岡新田・楨平・打杭・下広岡・牧野などが開発され、多くのところで今も耕地が広がっている。

大正10年(1935)に始まった下広岡新開開拓の場合、用水は阿木川本流の取水口から最初の田まで6キロ余もトンネルを掘るなどして水を引く大工事だったし、打杭のツツミもいくつもトンネルを掘って5.5キロほど水を引いている。作業はツルハシ、<sup>くわ</sup>鋤、モッコなど。全て手作業だったと言ってもいい。祖先たちは大変な苦勞を重ねて農地を広げてきたものだ。

農作業は機械が入るまではひたすら体を使ってしていたから、働きすぎて腰が曲がったお年寄りがあちこちにいた。

第2次世界大戦後、占領軍の指導で日本の民主化の一つとして「農地改革」が行われた。それまで地主から田畑を借りて小作料を払っていた小作人が自作農になった。「小作料は4~5割だったから十分にコメが食えない暮らしだった。田を買う金は払ったが値段は安く、いっきに暮らしが楽になった。おかげで家を建てた。」という人もいる。

これは阿木というより日本全体の、小作人が経済的にも精神的にも自立して主権者になるという大改革だった。

## 2節 野内の用水(新井)

阿木保育園や小学校の裏を流れる寺川の上流の新広岡橋の下から水を取って、<sup>ほらがた ほら</sup>衣母の洞をぐるりと回り、牧野のがけ下を<sup>ほらがた ほら</sup>通って野内までの、長さ2,571mが野内用水である。

この用水が通る前はため池がなく、田の水は雨水にたよっていたから、いつも水不足に悩まされていた。野内は高い所を<sup>かいこん</sup>開墾して新田(約1ha)を作ったため、天保3年(1832)は大日照りでさらに水不足になった。そこで、「新井がくれば野内中の田がうるおい、田植えもお天気しだいということがなくなる。寺川から水をひこう。」と岩村藩に嘆願したところ、許可が下ったのである。

六代目の藩主松平乗喬の命令により、天保4年(1833)に着工した。部落総出での難工事だったという。天保12年(1841)にやっと完成した。その頃は測量の機械がないので、夜のやみの中で<sup>たいまつ ちょうちん</sup>松明や提灯で用水の高さを決めて掘っていったが、掘り間違えた所が何か所か残っている。野内の押沢川に水が流れ込んだ時は「これで野内も夜が明けた。」と喜んだと伝えられる。

しかしこの用水が、どんどん水を取り入れ田をうるおしてくれたのではない。そのわけ

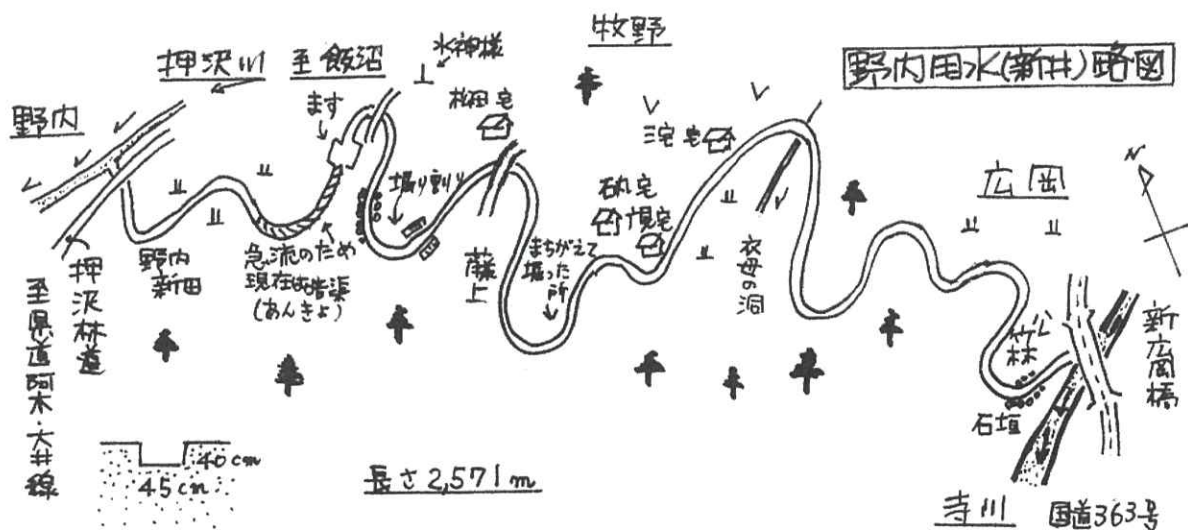
は、第1に寺川の水量が少ないため、上流の広岡で水を取るとわずかし水が流れない。第2には、寺川は流れが急なので大雨が降っても、すぐ流れてしまう。第3に、長距離のうえ、水路の回りは土で固めただけなので、水漏れが激しく水量は半分以下になってしまう。

昭和の初め、日照りの年があって田植えの準備をするのに野内用水にも水が一滴もこない。困った野内の人々は全員で、言い伝えに従って天狗森山の頂上に雨乞いに出かけた。ここには雨乞いをするとうすぐ降り出すという伝説の場所がある。

全員みのとひのき笠を持って、背丈ほどある熊笹をかきわけ3時間かけて登りついた。頂上には縦横約1mの池があり、いくら日照りでもじめじめしている。先ずは池の中に積もった木の葉を出し、泥をさらえ出し、かわるがわる小便を流しこむ。こうすれば、この山の主の天狗様がカンカンに怒って、しかえしに雨を降らせてひと暴れしてくださるというわけだ。

けれども雨は降らなかった。仕方がないので、寺川から広岡に水が行くようにしてあるせぎをこわしに行った。いっこうに水が来ないので翌日行くと、そのせぎは元どおりになっている。このせぎを巡っての水争いは、何度も起こったということである。

野内の人々は、毎年水が十分あることを願って押沢と牧野に水神碑を建てた。今では、この用水もU字溝や石積みで修理され、漏れる水も少なくなっている。4月になると毎年野内組総出で、井ざらいをして大切に管理している。平成4年(1992)には阿木小学校の子どもたちが野内用水をテーマにした劇をつくり上演した。



▲野内用水(新井)略図

### 3節 その他の阿木の主な用水

農業にとって水は生命線といってもいい。その他用水を次の表に掲げる。

#### 阿木の用水

	用水・水路の名前	どこから	どこへ	その他
広岡	こえざわ用水	こえざわ川	中組・清水・野内	
	きどかいり用水		清水・藤上	
	ほうのき用水		大野・飯沼	
	なしざわ用水		清水・下広岡	
	まつざわい用水	まつざわ川	中組・清水・野内	
岡	牧平用水	阿木川	下広岡	
	高砂い用水	ほうのき川	北側・大野・飯沼	
藤上	横ゆ用水	寺川	広岡・藤上・野内	
	新ゆ用水		藤上	
	かつらゆ用水	阿木・寺川	藤上	
	冷田用水		藤上	
野内	浮沼用水		野内・藤上	
	下ゆ	押沢川	野内	
野内	上ゆ	押沢川	野内	
	深田ゆ水	押沢川	野内	
	細ゆ	押沢川	野内	
	一丁田ゆ	押沢川	野内	
	奥洞ゆ水		上田・野内	
	駒洞ゆ水		野内	
見沢など	青木用水	阿木川	寺領	
	見沢用水	寺川	上田・宮田・見沢	約 2.0km
	宮田用水	阿木川	宮田・見沢	約 1.5km
	上田用水	寺川	上田	
大根本	下ゆ	寺川	大根本	
	うわゆ	寺川	大根本	
	新田ゆ水	阿木川	大根本	
	かんぼら水路	阿木川	大根本	
	新開水路		大根本	
八屋砥・久須田など	明治用水	阿木川 (ます池のずっと上)	真原・山野田・橋場	久須田川へ
	山野田用水	阿木川	久須田	
	打杭用水	阿木川・久須田川	山野田	約 5.5km
	八屋砥用水	久須田川	打杭・八屋砥・久須田	約 3.0km
	久須田用水	久須田川	土田・八屋砥	
	月がき用水	久須田川	久須田	
	竹の下用水	久須田川	新田	
	かみやり用水	阿木川	八屋砥	
	助道用水	久須田川	上平のつつみ・久須田	約 4.0km
	新開用水	阿木川	助道	
	中組用水	久須田川	中組	
西山用水 (上の平のつつみ)	阿木川 阿木川	八屋砥の西山	大正8年にできた	
飯沼	後田用水		藪下・野田・山の神	
	畑田い水	飯沼つつみ	飯沼	
	こびおも用水		飯沼	
	おおびょうも用水 (飯沼のつつみ)		飯沼	



#### 4節 おかいこ様

この地方では蚕のことを「おかいこ様」と呼んで、特別に大事にした。八屋砥の西尾ちかさん（明治29年（1869）生）の自叙伝「年輪」（平成2年（1990）発刊）より以下抜粋する。

恵那地方で養蚕が盛んになったのは、明治時代になってからです。特に明治の中期から大正にかけては、農家が現金収入を得ることができる仕事として養蚕農家が増えました。

飼料の桑の葉が生育し出す春から秋にかけて、年に二～三回飼うのです。忙しい時になると「今日は学校を休んで桑を摘め。」と父は私に言いました。「めかご」を腰にくくりつけ、指先に桑摘み用具をつけ、背負いかごを背負って畑へ行き、かごにびっしり一杯摘まないことには責任を果たすことはできません。

養蚕が盛んだった当時、農家の主婦は家族の着るものをほとんど自分で織って仕立てました。



▲養蚕のための暖房器具

## 3章 歴史(抄)

### 1節 縄文、弥生遺跡の発掘

久須田では今も縄文時代のヤジリ、石斧、縄文・弥生・古墳時代の土器片、戦国時代の山茶碗のかけらなどを見つけることができる。久須田遺跡を発掘したさい掘り出された、3000年ほど前の高さ50センチほどの土器が市に保管されている。

その久須田遺跡だが、発掘の結果、縄文時代と弥生時代の住居跡、多数の土器や石器などが見つっている。住居跡については縄文から弥生へと連続して住み続けたわけではなく、いったん断絶して、その後弥生人が入ってきた可能性があるという。

また土器については関東関西両方の影響を受けており、当地方が東西文化の交流地点だったことを示すもので、中津川市内あるいは岐阜県内で出土したものと同じ傾向だそうである。

阿木中学校郷土クラブの生徒が見つけた土器のかけらがきっかけとなって、阿木公民館が発掘を計画し、地元をあげての協力のもと、名古屋大学考古学研究室が調査をした事例がある。

禅林寺の北東、広岡方面に進んだ所にある<sup>おおびょうも</sup>大日向遺跡がそれである。発掘は昭和42年(1967)。大学調査団の宿泊先は禅林寺。阿木中の生徒らも協力した。

ここでは石器や土器などの他、縄文時代と弥生時代の住居跡、弥生時代の湿地を利用した小規模水田跡が発見された。この発見は、一般に「弥生時代に入ると住居を川のそばに移して稲作をした」と言われるが、弥生時代になっても小規模水田の適地があれば、縄文時代同様に台地に多くの人が住み、稲作を行ったことを裏付けるものとなった。

発掘の中でかめ棺が出土した。かめ棺は乳幼児の埋葬に使われたものと言われるが、出土したものはやはり小ぶりである。現在禅林寺で保管され、一般の人がいつでも見学できるようになっている。



▲久須田遺跡から出た土器  
(黒い部分は炭で、煮炊きしたことを表す)

## 2節 戦い

今に伝わる阿木兵の戦いという、「打杭で阿木軍と岩村城軍が戦った」という伝承のほか、織田信長軍が岩村城を攻めた上村かんむらの合戦で、飯妻新五郎いづましんごろうが討ち死にしたという話がある。飯妻新五郎は飯沼を根拠地とする武将と考えられている。

「阿木川の合戦」という言い伝えがある。これは、「武田軍と阿木軍が阿木川をはさんで戦った」というものだが、くわしいことは分らない。

阿木土建の事務所のあたりの地名を「たかかい」というが、「たかかいは戦いがあった所」と言われる。また、「たかかい」で勝った軍勢が分捕り品を焼いた場所が「灰坂」で、「灰坂」は今では「羽根坂」と呼ばれると伝えられている。現在の橋場クラブの前の坂のことだ。

久須田で圃場整備をしたさい、名前が彫ってあるもの無いもの含めて墓石がたくさんあって整理をした。「阿木川の合戦との関わりがあるのでは？」と言う人がいる。

武田軍が大根木の長楽寺や、根の上にあった龍泉寺を焼き落としたとも伝えられている。この件は「阿木の文化遺産」(平成29年(2017)発行)に書かれているのでご覧いただきたい。

「赤坂の戦い」という口伝もある。野内の赤坂で戦いがあって、何人か死人がでたということだが、時代やどんな戦いだったのかという詳しいことは伝わっていない。

## 3節 城主と領主

今の中津川市と恵那市は恵那地方といわれるが、古くは「遠山の荘」と呼ばれた。「遠山の荘」は平安時代後期から藤原氏の荘園になったとみられ、のち藤原氏の分家の近衛家が引き継いだ。

鎌倉時代になってここに加藤景廉かげかどが入り、地頭遠山氏の始祖となった。領主は公卿の近衛で、武家の遠山氏が地頭として介入した、というのが最近の研究成果として報告されている。(『平成30年(2018)『美濃源氏土岐氏研究講座』『武家文化歴史回廊講座』講義録』より千早保之氏の報告)

遠山氏は岩村を拠点としたが、南北朝から室町時代初期に領内各地に分家を作ったとみられている。その分家の一つが遠山安木氏とうやま あぎだ。奉公衆つまり室町將軍のガードマンとして仕えた武士として、「遠山安木孫太郎」の名が古文書に残されている。この「遠山安木孫太郎」は、荘園領主ならびに守護との関係は分らないが、阿木に住んで阿木を治める在地勢力、つまり「お館様(御屋形様)」とみていいのではないだろうか。



その後、遠山安木氏の名前はどこかで消えてしまう。また、荘園も戦国末期には支配力を失った。

宝暦元年(1751)に書かれた「巖邑府誌」には「大藤権允」、「堀田某」の名が挙げられ、「堀田某」は「久須田字堀田にいたかもしれない、墨壁の跡が今も残っている」と記している。この件について、「堀田某」は堀田土井守のことで、今も久須田の地に「土井神様」として祀られているのがそれだという説がある。久須田には小字に堀田、土井という地名が残っている。堀田某、堀田土井守については領主か城主か、詳しいことは伝わっていない。

さらに岩村藩の丹羽家文書《寛永16年(1639)》の「岩村近辺城主覚」には、阿木城主として戸田甚左衛門の名が記されている。この丹羽家文書は信頼性が高いと考えられており、戸田甚左衛門は城主ではあっても、領主ではないとみられる。

天正3年(1575)、織田信長が岩村城を落とし、武田勢力を美濃から追い出してからは、阿木城は用がなくなり廃城となる。よって領主はいるものの城主はいなくなる。

その領主が誰なのかははっきりしない。一応岩村城主が阿木の領主と考えると、織田信長が岩村城を落としてからは川尻秀隆と次いで団忠正、信長が本能寺で戦死した後は金山城主の森忠正、豊臣の世になって田丸直昌となる。関ヶ原の合戦後は阿木が岩村領になったとはっきりしており、大給松平氏、丹羽氏、松平氏と続いて明治維新を迎える。以後は領主がいない新しい時代となる。

なお阿木城については、「450年前の戦国末期に築城した」というのが定説であり、「築城から廃城まで長くて5年」という最近の研究に基づく説もある。両説に従えば城主がいた期間は短いものとなる。

#### 4節 焼かれた塞神神社

「塞神神社は関ヶ原の合戦のおりに焼かれ、のちに岩村藩主丹羽氏が再建した」と伝えられている。関ヶ原の合戦が岐阜県の西部、関ヶ原で戦われたことは広く知られているが、関連してなぜこの地の神社が焼かれたのか触れてみたい。

慶長5年(1600)、東軍は徳川家康本隊の東海道コースとは別に、徳川秀忠を総大将とする別動隊が中山道を通って関ヶ原に向かうことにした。しかし東濃では岩村、苗木、明知などの諸城主が西軍に味方し、東軍の西上を阻止しようとしていた。

このため家康は東軍に味方をする武将に、東濃諸城を奪うよう命令した。その結果、苗

木、明知、小里城などが攻め落とされ、続いて岩村城が攻められた。岩村城は富田口、岩村城南手、上村口から攻められたという。

この戦いのさい、両軍がぶつかる場所に近い塞神社は敵軍に利用される所だということで、どちらかの勢力が焼き落としたと考えられる。その当時、神社や寺は長い行列で移動する軍兵を一堂に集めて指示を伝える場所、軍議の会場、軍の宿泊施設などとしてよく使われたものだ。

## 5節 阿木騒動

文政7年(1824)、岩村藩は借金を払えなくなり、ついに財政破綻をきたした。そこで再建策として、領内各村に合計2000両の割り当てをして徴収、領内神社の立木の販売、家臣の俸禄米の借上げ(=減給)などに加え、文政11年(1828)に岩村松平家が講元となって「二十七会講」を始めた。

「二十七会講」は領内全村対象に年2回無尽を行い、27回で一回りするというもの。阿木の負担は1回あたり80両。後年、何回目かに阿木も落札して665両を得たが、藩に借金をしている分を先ず引かれる仕組みのため、実際は166両余が取り金となるにすぎなかった。藩にとって都合がいいだけで、農民は年貢等の負担であえいでいる上に、さらに掛金の負担がのしかかる。

講の始まる年、阿木の農民は「これではたまらない、二十七会講は一年間延期するように、いや半額の40両の掛金にするように」と、土田の若王子神社の森で寄合を開いた。これが「禁止されている徒党をした、一揆だ。」と断定され、庄屋、組頭、農民ら10人が牢に入れられてしまった。当時徒党は藩や幕府に強く訴える強訴<sup>ごうそ</sup>、農民が土地を捨ててよそに逃げる逃散<sup>ちようさん</sup>とともに、百姓一揆として固く禁止されていたためだ。(これを「文政の一揆」という)

さらに取調べの中で、見沢の八幡様の木を伐った際に販売代金を藩に出すべきところ、仲間分け合ったことと、年貢の滞納者が多数いることが分かり、加えて榎平新田開発の失敗問題が浮き出て、逮捕者が村全体に一気に広がり、大事件に発展した。

逮捕者は縄付きで連行された。その数、八幡様の木の関係で10人、年貢の滞納者については152人。阿木村の年貢を負担する高持百姓は当時200戸前後で、152人は約75%にのぼる。年貢米を出さないようにという談合があったとされている。

逮捕者のうち主な者は、村替え・所払いで阿木から追放、榎平で強制労働、過料を取ら



れるなど重い処分を受けた。阿木の農民は一方的に押さえつけられた。

ところで、この取調べの中で阿木の代官橋本祐三郎<sup>はしもと ゆうさぶろう</sup>も召し取られ、代官の地位や報酬ならびに名字帯刀取り上げの上打ち首という、極めて厳しい刑に処せられた。理由は橋本代官が公金を大いに使ったこと、年貢が納められていると偽って未納者を黙認し報告していた、ということのようであるが詳しくは伝わっていない。加えて橋本代官に関わったとして、家臣と岩村の商人計6人が処罰を受けている。

百姓ばかりでなく武士町人にいたるまで、領内全体にくすぶる改革への不満を、みせしめとして阿木の村民を大弾圧することで封じ込め、始まったばかりの財政再建を進めようというものであったと見ることができる。

財政再建策を強引に推し進め、一連の厳しい処断を下した中心人物は家老の丹羽瀬清左衛門だった。彼は引続き改革を断行した。その結果天保8年(1837)、領内全52か村の代表者たちは「辞めさせよ。」という嘆願書を差し出した。農民を領内各地に集め、打ちこわしなどの直接行動も辞さない構えをしての提出だった。(「天保の岩村騒動」という。)

これにより丹羽瀬家老は失脚、財政再建策は破棄された。そこには農民が処分されたという記録はいっさい無い。一揆は成功したのである。文政11年(1828)、若王子神社の森で寄合を開いてから9年後のことだった。

その後、橋本代官は農民を助ける義民として語り伝えられ、大円寺にある墓には恩徳をしのんで墓参する人がおり、令和の時代になった今日でも毎年5月3日にお祭りが続けられている。

## 6節 地下軍需工場

昭和20年(1945)という終戦の年だがその年4月、八屋碓で地下の軍需工場を掘り始めた。工事監督は陸軍中尉で、近所の民家に部屋を借りて住んだ。仕事は銭高組が請け負って朝鮮の人を使った。

発破で爆破する時は危険だから、家に入るよう近所の人に指示があった。夜は作業現場にいくつも電灯がついて構内は異様な明るさだったが、その頃は敵機の空襲がひんぱんにあり、空襲警報が鳴ると電灯がたちまち消されて真っ暗になった。

朝鮮の人たちは阿木川べりの粗末なバラックの飯場で寝泊まりしていた。配給食糧ではとても足りないのので農家から牛を買い、山で殺して食べていた。そのため山は牛の骨がゴロゴロあった。この時掘った地下工場は野田にもあり、今はトンネルとして使っている。



## 4章 大災害

---

### 1節 元亀元年、大野村全滅

元亀元年(1570)5月の大雨で大野村(現大野)は一村全滅という大被害を受けた。越こい沢ざわ、松沢まつざわが氾濫して大水が大野村に押し出し、一時のうちに白河原となった。家数50数軒のところ残ったのは12~13軒という大災害である。一村全滅の状態で、以降荒れ果ててしまったという。

復興開発が始まったのは慶長6年(1601)で、一時中断の時期を経て、その後岩村領主丹羽氏の命令で再開発となり、年貢が納められるようになったのは、寛文3年(1663)のことだった。大災害から97年後のことである。

「中津川市史」中巻は資料をもとに以上のように書いているが、「50数軒」という数と押し出されたとみられる岩石の広がり具合を見ると、広岡全体を襲った災害だと思われる。

### 2節 宝永元年、血洗いの池埋まる

「恵那神社誌」(梅村馨著、明治45年(1912)発行)によると、宝永元年(1704)に長雨による山崩れで血洗の池が埋まったと記してある。同誌によると、血洗の池は「深さ10数尺、大きさ300余坪の池」というから、深さ4~5mくらい、広さは1000㎡余りといったところか。

「中津川市史中巻I」は「災害の年表」に詳細を載せているが、この件についてはなぜか入っていない。

### 3節 150年来の大出水

安政2年(1856)7月12日、阿木村上空は雷鳴がとどろき、大豪雨となった。昔の人が「蛇じやぬ抜け」と呼んだ山林崩壊が発生し、松沢、越沢が大水で氾濫、大荒れとなった。「150年以来の大出水、山抜け」と書いた古文書が残っているが、くわしいことは分らない。

### 4節 コンクリート橋が語る大洪水

阿木農協前のコンクリート橋は途中でつないで、対岸に渡るようになっている。実はこれ、かつては川幅がコンクリート橋の長さまでだったものが、大洪水で左岸が流され、広がったために後からつないだものだ。

昭和32年(1957)6月27日、台風5号が当時の恵那郡阿木村を襲った。豪雨と雷雨で午後8時には時間雨量が66ミリに達し、「有史以来」という大被害をもたらした。阿木事務所に残る資料から、被害の概要・原因等を以下見てみる。(資料=同年7月1日現在)

人的被害	死者5人、行方不明7人、重軽傷2人
家屋の被害	流失14戸、半壊24戸、床上浸水45戸
公共施設被害	護岸決壊80か所、道路決壊175か所、橋梁流失38か所、 農用水路流失90か所、農用えん堤流失36か所、他
一般被害	田畑流失埋没15.3ヘクタール、田畑冠水45ヘクタール、 山林の流出50ヘクタール(植栽地)
被害額	(1) 土木施設、農業用施設、山林関係(同年9月1日現在) 現在の中津川市と恵那市の合計で4億2758万2千円。 うち阿木村の被害額は1億8973万8千円(全体の44.4%) (2) 農作物建物関係(同年9月1日現在) 阿木村は2億7046万8千円
大被害の原因	終戦後、阿木川水源地2400ヘクタールの森林伐採をしたが、 これにより数十か所の山腹崩壊が発生し、大洪水の原因となった
対策	治山治水対策として砂防、植林、山林の計画的伐採、護岸設備、 過去の流水も考慮した河川改修、村民の防水知識の徹底、水防資材 の充実、絶大なる国県の援助

被害額の欄を見ると、阿木が全体の44.4%と格段に大きな被害を受けたことが分かる。その原因は阿木川水源地の大規模な森林伐採だった。発生した山腹崩壊は土石流となって、阿木の繁華街を大きく削り取ってしまった。本誌は2ページに災害前の阿木の中心街図を載せた。今と比較して見ていただきたい。

被災から5か月後の昭和32年(1957)11月、阿木村は中津川市に合併した。以降、上記「対策」の事業を国県市を挙げて進めてきた。また区民は山を守ることは命を守ることだと痛感し、生産森林組合を中心に植林育林に励んで今日に至っている。

## 5節 伊勢湾台風他近年の災害

近年の阿木の大きな水災害を、一部だがみしてみる。

- 昭和5年（1930） 阿木川増水・死者1人、田畑流失埋没3ヘクタール
- 昭和15年（1940） 阿木川出水・死者1人、家屋流失2棟、田畑流失埋没2.5ヘクタール
- 昭和32年（1957） 上記「4節 コンクリート橋が語る大洪水」参照
- 昭和34年（1959） 「伊勢湾台風」 中津川市全体では死者7名、家屋全半壊1000戸余  
阿木では死者は出なかったが住家全壊44戸、半壊48戸等被害は大きかった。
- 昭和36年（1961） 阿木では飯沼の後田川が氾濫し、死者4名、家屋流失3棟。  
田畑や農用施設、水路などの被害総額は当時の金額で7000万円に及んだ。市内では阿木の被害が大きかった。
- 昭和58年（1983） 「9.28災害」 集中豪雨災害市内では特に阿木、神坂、中津川の被害が大きかった。阿木の場合、松沢が崩壊、飯沼川が氾濫。  
飯沼川流域では土石流により死者1名、家屋多数が半壊となる。  
3年間の災害復旧工事費の総額は24億3000万円にのぼった。



▲昭和32年 災害の爪あと（阿木川）



## 5章 暮らし

---

### 1節 食

- 明治一桁生まれの人の話。16歳で農家へ嫁いだ。嫁ぎ先の味噌は自家製だった。一年物だったためうまくない。熟成した三年物にしたかった。そうするには備蓄できるよう豆をたくさん作らねばいかん。三年物にするのに何年もかかった。
- 昭和一桁生まれの人の話。兄弟が生まれるたびにお祝いで「ちくわ」をもらった。今も売られている一番安いやつだ。野菜ばかりの食事だったからそれが誠にうまく、子ども心に「何人も生まれてくれ。」と願ったものだ。
- もう一つ昭和一桁生まれの人の話。カレーライスが戦前から家庭料理として食べていた。子どもにとっては特別のごちそうだった。肉は家でつぶした鶏の肉か飼っていたウサギの肉がたまに入る程度だが、ソースをかけて食べた。一般の家庭でカレーに肉がいつも加わるようになるのは、昭和45年(1970)を過ぎてからからはなかったろうか。
- 戦後まもなく結婚をした。物のない時代だった。お客さんに飲んでもらう酒を集めるのに苦労した。湯飲みや茶碗などは質が悪くても、とにかく買い集めて人数分そろえた。
- 終戦翌年に生まれた人の話。中学卒業とともに働きに出たのは昭和36年(1961)のこと。弁当のおかずは毎日漬物と梅干ばかり。たまにたっぷり塩のきいたサケが入っているくらいだった。働きに出るまでの毎日の食事というと、味噌汁(「おいしい」とか「おつけ」とも呼んだ)、味噌煮、漬物、それに野菜の煮物くらいで、味噌汁は朝たくさん作って食事のたびに温めて食べた。肉や魚は特別な日以外はずなかった。
- 昭和30年(1955)代頃までのごちそうは、餅、五平餅、赤飯、五目飯、おはぎ、ちらしずし、しる粉あたりが一般的だったといえようか。おやつにはからすみ、柏餅、スリ焼きなどを食べた。スリ焼きはお好み焼きみたいなものだが、米の粉と小麦粉を混ぜてそこに黒砂糖を入れて焼いた。甘味と食べる物に飢えていた時代だったから当時はうまかったが、その後時代とともに消えていった。
- 餅は白いのだけでなく、よもぎ餅や豆餅、「あんぼ」と呼んだ大福餅があった。くず米を入れたボロ餅もついた。今はボロ餅を作らなくなったが懐かしがる年寄りはいくいる。
- 昭和40年(1965)代前半までは「通い帳」というのがどの家庭にもあったように思う。持って店に行き、買い物の中身を書いてもらってツケで買い、支払いは盆と暮れだった。現金収入が乏しい時代のことだ。当時の店は客の注文に応じて、天秤ばかりで量り売りをしたものだ。買い物は店が新聞紙で作った袋に入れてもらい、竹を編んだ背負い籠な

どに入れて持ち帰った。

- 過去長い間ずっと、肥料といってもたい肥、草、人糞くらいしかなかったから、米も野菜もたくさん収穫できなかった。食料が少なく、多くの人がひもじい思いをした。野に生えているヨメナ、チチナ、セリ、オコギなども食べて腹の足しにした。
- 肉は年をとって卵を産まなくなった鶏をそれぞれの家で解体して食べるか、ウサギを飼っている家は防寒用に毛皮だけ売り、肉は食用にした。黒鯉を池で飼って、特別のお祝いの日などに食べた。あとは川魚、鳥屋<sup>とや</sup>でとった小鳥くらいか。飼っているものを食べることはあっても、買って食べることはあまりできなかった。こんな暮らしが昭和50年(1970)頃まで続いた。
- たまに買う魚介類は塩漬けか干したものの、佃煮などいたみにくいものだった。サンマといっても塩サンマだが、半分に切って頭の方は大人が、しっぽの側は子どもが食べた。一匹丸ごと食べるようになったのは最近のことだ。
- 海産物がこの地方の人の口に入るようになったのは、明治時代後半に国鉄中央線が開通してからだと思う。また、刺身や生魚が口に入るようになったのは、店に冷蔵庫が置かれてからで、昭和40年代(1965)前後からではないだろうか。ちなみに冷蔵庫ははじめは氷で冷やす型だった。氷は大井の町からオート三輪などで毎日、砂利道を通って阿木の店に届けに来た。その後電気冷蔵庫が普及した。
- 中央道が開通した昭和50年(1975)頃だったと思う。このあたりからは、専用トラックで運ばれた生きた魚や獲るなり船上で冷凍した魚など、超新鮮なものがすし屋などに並ぶようになったように思う。
- 戦後しばらくして食生活改善運動などがあって料理の種類が増え、味付けも豊かになって食事がうまくなった。以降、「出された料理にうまい、まずいを言うもんじゃない。」などと子どもを叱りつけることがなくなった。
- クリスマスケーキは昭和35年(1960)以降、阿木の人も食べ始めたようだ。昭和45年(1970)すぎという人もいる。それまでは現金収入が乏しい時代だったから、親は「うちには仏教やでサンタは来ん。」などと言って、買い物を極力抑えたものだった。
- 結婚式の会場は自宅か神社などが主だったものが、昭和50年(1975)すぎあたりから式場やホテルでやる人が出てきた。初めてそういう場所に呼ばれた人のことだが、「ステーキが出されたがナイフを動かしてもちょっとも切れん。必死でやったら勢い余って皿から飛び出し、あわてて手をつまんで戻した。周りの目があるし恥ずかしかった。」



という。ナイフやフォークを使い慣れない時代だった。

■「毎日が正月だ。」という言葉が流行った時期がある。かつては正月くらいにしか食べられなかったごちそうが毎日食卓に上る、ということ。平成3年(1991)にバブル景気がはじけたが、その頃のことだ。

■バブルたけなわの頃の親子の会話。

親 (嬉しそうに)「今年は豊作だで再来年の4月頃まで家族が食う米を蓄えておける。」

子 「古米なんか食うのはイヤだ。生産者やで新米を食うようにしよまいか。」

親 「阿木には一年分備蓄して、不作に備えていた家もあるぞ。」

子 「そんなの古古米やに。まずうなってから食うことない。食うものが無けりゃ買えばええ。」

バブル景気の頃は世界中から食料を輸入し、「飽食の時代」とか「グルメブーム」とも呼ばれた。しかし不作や、ひょっとしたら飢饉を経験して、家族に食わせる食料を確保する苦勞が身に染みている親の感覚と、時代の真ん中にいる子の感覚とのズレが現れた会話だった。

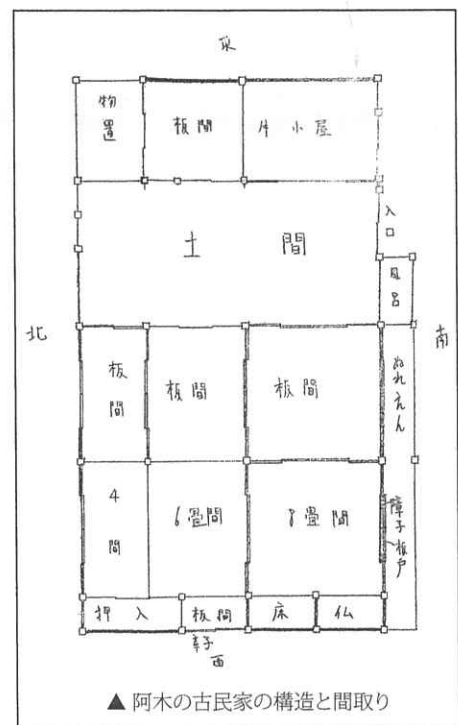
## 2節 住居

＜阿木中学校郷土クラブが発行「郷土研究」から＞

昭和47年(1972)に阿木中学校郷土クラブが発行した「郷土研究」という本が残されており、ここに「阿木の古民家」の調査報告がある。

それによると、クラブのメンバーが阿木の全ての家690戸を回って調べたところ、草屋根(茅葺屋根)は母屋で41戸、納屋・物置などの小屋で30戸が残っていたが、トタンや一部瓦を用いている屋根があり、完全な草屋根は21戸だと記している。また、古い家は、ちような削りの柱、ぬれ縁、戸袋がない、などの特徴があると指摘している。

さらに古い家の構造と間取りについては、調査時点では建築当時のままという家はないものの聞き取りをしたのが右記の図だと言っている。阿木の典型的な農家の構造なので紹介する。





特徴 ① 入り口のすぐ右が牛小屋

② 表玄関から裏玄関まで土間になって通り抜けができ、作業場となっている。

③ 板の間が多く、養蚕の盛んな時は畳の部屋まで含めて蚕を飼っていた。

④ 戸袋がなく、雨戸は土壁の内側に納める構造となっている。

この家が以下のように造り替えられた。

① 牛小屋は畳の部屋に代わった。

② 土間は真ん中に一部屋作られ居住空間に。

玄関は土間のままで表と裏の二か所になる。

③ 板の間が減って畳の間となる。

こうした間取りの家は中学生が調査した昭和40年(1965)代初めには、暮らしぶりが変わるにつれて、減るばかりとなってきたと記されている。

阿木は「家が大きくてたくさんの建物がある」という特徴がある。大きな母屋、納屋、離れ、蔵、外便所、最近では車庫——これらがそろって一軒の家だ。こうした作りは阿木と隣の恵那市東野・岩村町富田地区に集中している。



▲ 茅葺き屋根 岩村町富田 茅の宿  
かつてはこのような家だった。

大きな母屋というのは養蚕の歴史と結びついていて、貴重な現金収入源として「お

蚕さま」と呼び、家族は蚕棚の隙間で眠るほどで、大変盛んだった。その収入で蔵を建てたのだろうか。阿木で養蚕が一番盛んだったのは明治中期から大正時代だったという。

また、八畳の間が二間かあるいは三間続いているのは、多くの人が集まる結婚式や葬式を自宅で行った歴史とも関わりがあろう。

今も太い立派な柱やハリの民家が残っているが、一般の人が太い木材を使えるようになったのは明治以降のこと。「大きな家」も同じく明治以降に造られたものだ。江戸時代、岩村藩は一般の人が太い木材を使うことを禁止していたし、大きさも厳しく制限していた。

中津川市史によると、寛永20年(1643)の阿木村検地帳に記録されている67戸の家の広さは平均坪数が12.6坪=42平方メートルほど。畳の数なら25畳余りと、今述べた家と比べると格段に狭い。また同誌は、当時の家の広さは経済力ではなくて、本百姓、水呑百姓、小作人という身分の差や家格によって厳しく制限されて差がついたと記している。

大きな家を造ることができたのは、優秀な技術を持った大工さんがいたためだ。阿木では見沢に藤沢茂助さん（明治15年（1882）～昭和26年（1951））と藤沢薫市さん（明治41年（1908）～昭和37年（1962））という、親子二代にわたる伝説的な名工がいた。二人は阿木農協の前身の阿木信用購買販売利用組合の建物や、阿木診療所も造っている。またその弟子も、阿木ばかりでなく近在に広がっていった。

蔵が古い時代のものかどうかは基礎の石垣を見るとよい。新しい、と言っても昭和に入ってからだろうが、その頃の蔵の石垣はきれいに割りそろえた四角い石を斜めに線が入るように積み上げ、場合によってはセメントで目地をしている。

一方古いものは、自然のままの石を使って大小混ぜて積んでいる。こうした石積みの方を野面積みというが、江戸時代に造られたものかもしれない。野面積みの基礎の上に蔵を築いている家は、阿木の中では極めて数が少ない。

かつて阿木の家々は、自分の持山から木を伐り出して、阿木の製材所で製板し、大工・左官をはじめとした阿木の建築技術者が寄り集まって建てるとというのが一般的だった。

また、節がなくて年輪の詰まった太いヒノキの柱や長押はあこがれの的だった。

それがサラリーマン化して山へ行くゆとりがなくなり、暮らしぶりが変わり、安い外材が入ってきて、建築資材も新製品が次々と出、耐震化など法律が強化された等々のことから、今日見られるような新しいタイプの家が造られるようになった。昭和の後期あたりからであったろうか。

おおむね新しいタイプの家は、断熱材を使った壁やフローリングの床、バリアフリー、トイレを屋内に取り入れたものになっている。気密性が高い。それまでの家は座敷・床の間・縁側があり、土壁で、畳・ふすま・障子戸の「田の字型」と言われる作りだったが、大きく変わってきている。

また、平成7年（1995）に発生した阪神大震災などの教訓から地震に強い耐震構造へ、さらに太陽光発電を設置するなど、暮らしや考え方が進んだことで住宅のづくりも進歩した。

家のづくりが変わるにともなって暖房も変わった。

阿木中の郷土クラブが調べた草屋根の家が全盛の頃は、囲炉裏・おきのコタツ・ばんこ・湯たんぽ・ひばちくらいで暖をとっていたものが、昭和35年（1960）すぎあたりからだと思うが石油ストーブと電気コタツが普及した。最近ではエアコンや床暖房が完備した家が建てられている。

家が夏は涼しくて冬は暖かいものになってきている。住環境がよくなったことが、食



生活や衣類の改善、医療の進歩などとあいまって、長生きをすることができるようになった大きな要因だと一般に言われている。

### 3節 阿木の行事

#### (1) 年末行事

##### 門松づくり

山へ行き門松用の木を伐ってくる。阿木地域では「松」と「そよご」を使って門松にするところが多い。立てる前にタツクリ（煎っていないもの）とお米をお供えしておく。30日までには立てる。門松の足元には、川から砂を取ってきて盛っておく。

##### もちつき

鏡餅及び正月用の餅を28日頃つく。29日は、苦餅になるといって縁起を担ぎつかない。農家の家では鏡餅をお供えするところも多く、大きい鏡餅を五重ね、小さい鏡餅を十重ね以上作る。昔は5～6臼ついていた。現在ではせいぜい3臼。

##### お歳取り（12月31日）

鏡餅の上に葉付きみかんをのせ神棚、仏壇、土蔵、みそ倉、農機具倉庫等にお供えする。主要なところには「実付きのそよご」の小枝をいっしょに供える。お鏡等飾り物は一日飾りはよくないので、30日に飾った方がよいといわれている。

31日、風呂に入り体を清めてから、神棚等にお神酒及びお火を上げ、歳取りのごちそうを食べお歳取りをする。

歳取りのごちそう鍋の中身は、ゴボウ、だいこん、さといも、豆腐、コンニャク、糸昆布を入れ、食べるときに鰹節をかけて、縁起のいい奇数の七種類にする。

#### (2) 正月行事

##### 元旦

起床後、その年の恵方に向けて拝礼（その時にタツクリをお供えする）元旦の食事の準備は一家の主人がする習わしである。

まず、若水（年の初めに汲む水のこと）を汲んで雑煮の準備をする。家族が起きたら新年のあいさつをしてお茶を飲む。その時出すお菓子は、甘納豆、焼き栗、干柿、他生菓子等。（「まめでくりくりかきこめかきこめ」と言われていたそうです。「かきこめ」とは、幸せや金運を取り込めということ）その後、雑煮を食べる。



朝食がすんでから、神社、お寺等への初参り。阿木の場合は各集落に産土神様うぶすなかみがあり、まず集落のお宮様をお参りして、昔、村社といわれた阿木地区全体の神社をお参りする。

## 2日目

朝食は、山芋をすりおろし、だし汁と混ぜた「いもじる」を食べる。寺檀家の場合は、お寺へ年頭に行く。

### (3) 若木むかえと御日待

#### 若木むかえ

正月三ヶ日が明けた4日の午前中、組（集落）の住民全員が出て組所有の山へ行き、集会所で一年間使うたきぎ（いろり及びかまど用）を作る。

#### 御日待

若木むかえの作業を終えた4日の午後、集会所のいろりを囲み、酒を酌み交わして宴会をする（組の新年会）。この日の当元の方たちは、集落によっては、味ご飯をかまどで炊き、宴会が終わるころ出す。ご飯を炊く量は人数分より多めに炊く。宮田組の場合は30戸あるため、2升炊きのお釜を三つ炊いていた。それぞれのお釜のご飯を食べ比べ、最後当然ご飯が残ってくるので「き競り」をして、競り金の高い人が持ち帰る。

### (4) 十五日正月

「ひしもち」を作る。13日に餅をつき、お鏡餅と同じ数だけ作る。ひしもちを飾るときは、その上にみかん及び干柿を乗せる。

「もちばな」を作る。薄く伸ばした餅を1センチ四角に切り、竹の枝にたくさん刺して、稲穂になぞらえて実っているようにして飾る。終わった後は竹からとっていり鍋でいたり、油で揚げたりすると、よいお菓子代わりになる。また、木の枝に小さく丸めた餅を刺し、繭玉として飾るところもある。

「ニギ」を飾る。直径5センチほどのニギの木を、長さ20センチほどに切ってそれを半分に割り、消し墨で十二と書く。（うるう年の場合は十三と書く）そのニギを、門松を取った時に残しておいた杭と砂のところにおく。また、土蔵の前にも置く。ニギの木は終わった後、竹馬の足を乗せるところによく使った。

「どんど」を作る。14日午前中に正月立てていた門松を、子どもたちが各戸から集めてきて親たちと一緒にどんどを作る。どんどの作り方は、まず真中に高い青竹を立てる。

竹はてっぺんだけ少し枝を残し、幣束（<sup>へいそく</sup>神官さんに作ってもらう）を飾り、その下はわらを巻き付ける。その周囲に集めてきた門松の木を押し付けて縄で縛る。<sup>しば</sup>燃えやすいように子どもたちが集めてきた杉の葉を真中に入れておく。午後3時ごろどんどに火をつける。組の人たちが餅を持って集まってくる。どんどで焼いた餅を食べると一年間無病息災と云われ、また、書初めを燃やし高く上がると字が上手になると言われている。そのうちに周囲で宴会も始まるが、帰りにはどんどの火を家に持って帰ってそれで神棚等へお火を上げる。

15日の朝は元旦の朝と同じようにお菓子を食べてお茶を飲む。その後、あずき粥（あずきを入れて炊いた粥の中に焼いた餅をいれる。）を食べる。神棚等にもあげる。秋じまいに漬け込んだかす漬のタクアンはこの時に初めて出す。あずき粥にはこのタクアンがよく合っている。十五日正月は、百姓の正月と云われている。

## (5) 節分

イワシの頭を割りばしに刺したものとヒイラギの小枝を、一緒に玄関及び土蔵・みそ倉・倉庫などの入り口に取り付けておく。また、<sup>めかこ</sup>目籠を長い竹竿に取り付けて玄関あたりの屋根に立て掛けておく。

夜になったら「鬼は外、福は内」と叫びながら豆をまき各部屋を回る。最後に玄関から外にまき、玄関の戸を閉める。豆まきが終わったら自分の歳の数だけ豆を食べる。一握りで自分の歳の数だけつかむとよいと云われている。

## (6) 賦せん<sup>ふ</sup>

3月末に行われる。組（集落）内で使用した一年間の金勘定を行う日。今でいう総会である。水路や道直し等の使役で出た人はお金がもらえ、御日待などでご飯を競って買った人はお金を払わなくてはならない。また、役員改選もこの日に行われる。組長さんについては1カ月前に選挙で決める。

多くの組が「賦せん」が終わると宴会を行う。この日も、味ご飯が炊かれ残ったご飯は競りにかけられる。この日に競り落としたお金は一年後に払えばよいから競り人も増える。ご飯だけでなくお酒や<sup>もら</sup>貰い物の品物なども競りにかけられる。

## (7) ひなまつり

阿木地域では、月遅れの4月3日である。お供えのお菓子として「からすみ」を作る。米粉を練って木の型（長さ20センチ、高さ4センチほどの富士山の型をしたものがほとんどである。）に入れ、蒸したもの。白いものは白砂糖、黒いものは黒砂糖を入れて味付けし、桜の花びらをあしらったもの、色粉で色付けをしたもの等、結構種類が多い。100本ぐらい作る家庭もある。

また、ひな祭りの日は、子どもたちが「お雛様<sup>ひなさま</sup>見せて」と言いながら組内を回り、各戸で用意をしていたカラスミやお菓子をもらう。この日は結婚して外で暮らしている人や、お嫁に行った人などが子どもを連れてくるので、実際に住んでいる子どもの数の何倍にもなり、それを想定してカラスミやお菓子等を用意する。この行事のことを「かんどうち」と言う。

## (8) まつり

各集落に神社がある、豊作祈願、収穫御礼の目的で春祭りとお祭りを行う。春のお祭りは、赤飯を炊き、おにぎりにしてお供えする。また、<sup>なおり</sup>直会の時には1戸に2個ほどづつ配る。秋のお祭りは、「おいだて」と云われている。甘酒を作りお供えする。また、直会の時には皆さんにふるまわれる。赤ちゃんの初参りもこのお祭りで、お祓い<sup>はら</sup>をしてもらう。

「おいだて」は「お湯立て」のことで、お湯を沸かして、そのお湯でお祓いをしたと云われている。今でも石造りのかまどが残っている神社がある。



▲初参り



▲おいだて

## (9) 男の節句

6月5日に月遅れで男の節句の行事をした。事前にこいのぼりをあげ、当日は玄関先のひさしの瓦の間に「ショウブ」と「よもぎ」を一緒にさして飾る。夜は、ショウブを浮かべた風呂へ入り、ショウブで鉢巻<sup>かぶと</sup>をしたりもした。紙で作った兜をかぶって遊んだのもこの日だ。今では5月5日だが、ショウブやよもぎもまだ小さいのでやらない。



## (10) お茶番

地蔵様の分身（小型の地蔵観世音様）と弘法様（掛軸）を各戸にて1カ月自宅で祀り参拝し、翌月一日にはとなりの家に申し送る。ただし、8月には、地蔵堂に安置し、1日、10日、20日、30日の4日間、地蔵様と弘法様のお祭りをするを「お茶番」という。当元の方は、お酒、食べ物等を用意する。（宮田組の場合）

## (11) お盆

阿木地域は8月盆（旧盆）である。東農5市のほとんどの地域では、7月盆だ。恵那南地域の旧7か町村は8月盆である。ただ全国的には8月盆が多い。各企業では8月に盆休みがある。

専用の台に戸板をのせ、その上にゴザを敷く。仏壇から位牌を出してその上に並べる。お花を飾り、野菜、果物、お菓子等をお供えする。

13日夕方、家の前で「迎え火」を焚く。迎え火の「たいまつ」は「あかし」（松の木の油分の多いところ）で作る。

仏壇に出す食事は13日夜は白いご飯と味噌汁またはお吸い物、14日朝はなす粥、昼はあんころもち、夜はササゲとなすの味噌和え、15日朝は白い餅に砂糖をのせる。昼はそうめん、夜はかぼちゃの煮物、お夜食はあずき粥となる。箸は麻の茎を折って使用し、食事ごとに新しいものにする。食事の後には必ずお茶と水を出す。

15日お夜食の後、キュウリの馬とナスの牛に、豆の葉にお夜食のあずき粥及び味噌と塩を包み、飾ってあったお花等も一緒に「送り火」を焚き、お送りする。大川まで行きロウソクと線香を灯して川へ流す。帰りは家につくまで後ろを振り向かないようにせよと言われている。

16日のお昼は、辻めし（チラシ寿司等）をお供えする。またこの日は、お帰りになる仏様にけがをさせてはいけないとのことで、鎌など切れるものは使わないしきたりである。組によってはいろいろなやり方もある。

## 4節 安岐座

昔、見沢の八幡神社の東横に掛舞台があり、祭礼の折にここで素人芝居などが催されたという。安政6年(1859)に近隣の村々にない新しい立派な舞台を作りたいという村人の願いから、村中総出で工事が始められ、翌年安政7年(1860)3月27日棟上げとなった。それが安岐座で、後に公会堂と呼ばれ、今の保育園の地に建てられた。

安岐座を作る良質な材料は、持ち主の了解なく阿木の山から切り出されたことが問題となったこともあったと言われている。舞台は回り舞台で、両脇には花道があり、二階には光を取るための天窓までついていた。玄関を入ると舞台の中に外飾りがあり「これが八幡神社の掛舞台のなごりだ。」とわかる。

明治8年(1875)阿木に小学校が建てられることとなり、「安岐座は無用の長物だ、これを改修して小学校にすればいい。」等々、議論がたたかわれたが、結局そのまま残されることとなり、明治10年(1877)6月に小学校は完成した。

## 5節 公会堂と秋葉様

安岐座は大正3年(1914)に大改修を行っている。それまでの板葺きの屋根を瓦葺きとし、楽屋を継ぎ足し広い天井を張り替え、客席の横に飲み物等の店が出来るようにし、名称を安岐座から公会堂と改めた。この時、大きな看板を揚げた。看板には火事にならないようにと雨と縁の深いカエルの飾りを付けた。それがききすぎてか、雨が降り続くので看板からカエルを取り外したとの逸話が残っている。今は地域振興センター2階に保存されている。

この公会堂が火事にならないようにと、また阿木村に火事が出ないようにと願って、秋葉山から秋葉三尺坊を迎え、そんで坂にお堂を建て阿木村中でお祭りした。それからこの坂のことを秋葉坂と言っている。今は寺領組・本庄組・野内組でお祭りをしている。

大正7年(1918)阿木に初めて電灯がつくことになり、送電を始めた日、公会堂で芝居が上演されており、「パツ」と電灯がついた時、人々は一斉に手をたたき、「まるで昼間のようだ。」と喜びあった。

昭和8年(1933)に明知線が開通した時、お祝いに芝居を一週間かけて上演した。村内各組々で練習した芝居だ。観客は毎日毎日、わりご弁当をさげて、隣近所をさそい出かけた。こんなことは前にも後にもなかった。

しかし、その後太平洋戦争のため芝居どころではなくなった。昭和19年(1886)名古屋の陸軍造兵廠が阿木に疎開してきて、公会堂の床を取り払い機械をそなえ付けて軍事工場とし、そこで大勢の女工さん達を働かせていた。女工さん達の食事はどんぶり一杯で、中は麦と高粱こりゃんがほとんどで、米粒は数えるほどしか入っていなかった。女工さん達は「お国のために頑張る。」と言っていたが、戦争に敗れて、やがて機械は運び出されていった。



## 6節 阿木劇場

公会堂は昭和22年(1947)に再び改修して、阿木劇場と呼ぶようになった。活動写真や映画・芝居などが度々催され、にぎわった。その宣伝のためチンドン屋がドラムを先頭にトランペット、トロンボーン、クラリネット等の楽器で軍歌や流行歌を演奏しながら各集落を回っていた。楽士の後ろに子ども達が行列をつくっていた。

昭和32年(1957)中津川市に合併し、建物は阿木の財産として残していたが、テレビの普及で阿木劇場はほとんど使われなくなった。

その後、資材置場として貸し出され、保存の検討も行われたが老朽化も激しく、危険になったので昭和57年(1982)5月に取り壊された。その跡地に保育園が建てられている。

こうして、長い間の風雪に耐え、阿木の芸能の殿堂として人々の喜びや楽しみ、そして悲しみ苦しみをともにしてくれた安岐座・公会堂・阿木劇場は、約120年の幕をとじた。

その後、阿木小学校体育館で阿木文化祭・敬老会を行った。昭和60年(1985)阿木中学校体育館が完成した際には、地歌舞伎と安岐太鼓・舞踊が上演されている。さらに平成10年(1998)に中の島公園ふれあいの里が完成し、そのホール(ホール東横には、歌舞伎倉庫がある。)で子供歌舞伎が上演された。毎年の阿木文化祭・敬老会などで芸能発表がされており、阿木の芸能魂は絶えることなく受け継がれている。



▲ 改装された阿木公会堂

## 7節 結婚式

### (1) 昭和6年(1931)に17歳で阿木に嫁いできた女性のこと

見合いさえなく親が決めた結婚だった。結婚前のこと、ある日自宅に帰る道すがら、女性は2人の男の人とすれちがった。その人たちが後に夫となる男性と仲人で、通りすがりに女性は顔を一方的に見られたわけだが、それが夫にとっては見合いと言えれば見合い、女性は全く知らないことだった。

親に説得され嫁ぐことに。阿木の家初めて来たのは嫁いだ日。先ず囲炉裏端に座らされたが、しばらくの間、どの人が夫になる人なのか分からなかった。お客さんは翌朝まで飲んで騒いでいた。



## (2) 終戦直後に結婚した女性のこと

もう亡くなられたが「あの人は立派な家柄の生まれで、本来なら阿木の百姓屋へ来るような人じゃない。食料不足の時代だったもんで、農家なら食べるものにはこと欠かんだろうと、親が決めて嫁らかした」と言われる人がいた。

終戦後しばらくはまだ「家柄」が結婚の大きな条件だったが、食糧難は結婚や人生まで左右する極めて切実な問題だった。

## (3) 昭和35年(1960)に見合い結婚をした人

結納金は3万円。全て千円札。まだ一万円札がない時代だった。男性はシワシワの札にアイロンをていねいにかけて、ピン札のようにして届けた。

女性は式の前、慣習にしたがって、「足入れ」と呼んだが初めて嫁ぎ先の家を訪問した。また、これも慣習通り花嫁道具を紅白の幕で飾ったトラックで嫁ぎ先に事前に送り届けて、近所の人たちに見てもらった。タンス(和・洋・フトン)・下駄箱・ミシン・たらい・洗濯板・鏡台・アイロン・着物・裁縫台などだった。

式場は嫁ぎ先の家。文金高島田の衣装ごしらえを生家でして、トラックに乗せられて阿木に来た。床の間を背に新郎新婦が真ん中に座り、両脇に仲人、親族と両隣の家の人たちが縦に並んだ。三々九度をした。料理はお膳に乗せられていた。そのお膳の半分は隣の家のもので、お互い同じデザインのものを買って、貸し借りをして助け合ってきたしろものだ。

式は近所の人たちが見においで。雨降りだったが表の戸を開け放し、一斗缶に入れたせんべいを配った。新婚旅行は行かなんだ。同級生でも行った者は少ない。そんな時代だった。

## (4) 生活改善運動の頃の結婚式

昭和47年(1972)は生活改善運動の盛んな頃で、その影響を受け阿木公民館で挙式した。恋愛結婚だった。仲人の他、親戚、友人、それに集落の小组の人たちも招待した。大根木では後継ぎの結婚式の場合、小组の人たちに来てもらう伝統があった。

生活改善運動については落合公民館の場合、昭和45年(1970)当時は貸衣装もそろえて地域の人たちが利用していたし、建設したばかりの中津川文化会館は結婚式場を備えていた。

## (5) 新しい時代の結婚式

昭和40年(1965)前後から恋愛結婚が一般的になったようだ。多くの友人に囲まれた人前結婚式も行われるなど、結婚がそれまでの家中心から人中心へと、戦後の民主主義の考え方が浸透してきた様子がうかがえる。

式場も自宅から神社や公民館などに移る。新婚旅行先は海外へ行くカップルが増えだした。

昭和50年(1975)代後半あたりからだろうか、挙式会場が公共施設から専門の結婚式場やホテルなどに移り、披露宴では華麗で豪華なパフォーマンスも見られるようになった。暮らしぶりが豊かになったことと関係がありそうだ。

また平成に入った頃からは、結婚式は海外など遠くの教会などでごく身内で行い、あるいは逆にジミ婚にしておいて、披露宴は別の日に、結婚式とは別の会場で、多くの友人を呼んで盛大に催す新しいやり方が見られるようになってきた。

## 8節 葬式

葬式はずっと昔から集落の小組単位で行っている。小組では組内の人々が亡くなると、一家で2人が2日間出る。主な仕事は男性の場合、葬列の道具を作ったり墓を掘ること、女性は亡くなった家族やその親せき、小組の人たちの食事を作って接待することだ。

昭和45年(1970)の葬式に、小組の人たちが豆、サツマイモ、マキなどをそれぞれ持ち寄ったことが、ある家の書類に残されていた。

昭和55年(1980)あたりまでは、阿木では土葬の風習が残っていた。小組の者数名が出て棺が入る大きさに掘る。以前埋葬した人の骨が出ることもあった。この担当者たちには「特別にご苦労だ」ということで、酒と料理が墓まで届けられ、そこで飲食してもらうという風習があった。

葬列は平成の半ば頃まで続いたろうか。先鐘・旗・生花・杖・笠・遺影・香炉・靈膳・位牌・棺・天蓋・墓標などを、遺族・親族・両隣の家の人らが持って歩いて墓まで行く。亡くなった人が80歳を超えている場合は「長生きでめでたい」ということで花かごを造り、小銭を入れて行進の道すがら辻々でまいて、野辺送りを見送る人たちに拾ってもらった。



▲ 阿木の葬列

棺は孫が担ぐものとされた。孫たちは、鼻緒に障子紙を巻きつけたわら草履を家の中ではいてから出発した。出棺はしきたりで、玄関からは出ないものとされていた。

墓に着くと棺を先ず蓮華台の上に乗せ、和尚さんの読経に合わせて行列一同は三周する。そして納棺・土をかぶせた後盛土に鎌を刺し、その上部に三本の竹を支えに人間の頭ほどの石を縄でしばってつるした。

帰宅すると親族は小組の人たち全員を「皆さんのおかげですみました」と、酒をふるまって接待する。この時ナタで切ったつきたてのモチを食べる。包丁で切ってはいけないことになっている。やがて小組の人たちは念仏を唱え、その後帰宅。それから親族は改めて慰労をした。

葬式翌日は「墓直し」、一週間たつと「初七日法要」、やがて「四十九日法要」と続くわけだが、いつの頃からか、告別式と初七日法要を同時に行うようになった。

土葬が火葬になり、葬儀の会場が自宅からセレモニーホールなどに代わると、小組は葬式や葬列の準備の仕事がなくなった。今では参列者の受付と駐車場の整理くらいである。

なお葬儀の会場としてセレモニーホールを使うようになったのは、平成の時代に入ってからである。



## 6章 信仰

### 1節 阿木の民間信仰

#### (1) 阿木の民間信仰

阿木地区には19か所に念仏堂ねんぶつどうが残っている。この数は他地区に比べて多いといわれている。

阿木では家の中に神棚と仏壇を祀っているが、不思議ともおかしいとも思わない。これは「神仏習合しんぶつしゅうごう」の名残なごりと言われている。「神仏習合」とは、神様と仏様が融合し、一つの信仰体系として再構成（習合）された日本独自の宗教的現象である。

阿木における神仏習合の例として『萬嶽寺の豊川稲荷「大正6年(1917)」建立』、「塞神神社の裏山の坊さんの墓」、「長楽寺の奥の院風神神社」、「長楽寺近くにある禰宜屋ねぎ」（ねぎは神官のこと）などがある。明治以前はお寺に神主が、神社に僧侶がいるのはよくあることだった。

阿木の各地域の集会場には、多くに阿弥陀様やお薬師様が祀ってある。これは、江戸時代には5人以上の集会は禁止されていたが信仰に対してはお目こぼしだったため、阿弥陀様を祀る名目で人々が集まって世間話を楽しんだ名残である。

明治になって「神仏分離令」「一村一社」の令が公布され、それまで神社にあった仏教関係の「四十八夜供養塔」などが別の場所に移された。これらが今も大切にされているのは、多くのお地蔵さんを始め、庚申塚などが大切に守られているのと同じで、阿木の人々の信仰深さを示している。

#### (2) 野内の念仏堂（薬師堂）やくしどう

野内地区の念仏堂（薬師堂）もそのひとつである。元禄5年(1692)萬嶽寺にあった「薬師如来像やくしにょらいぞう」を縁あって野内の人々で管理することになった。その像をお祭りしたのが



▲ 野内薬師堂

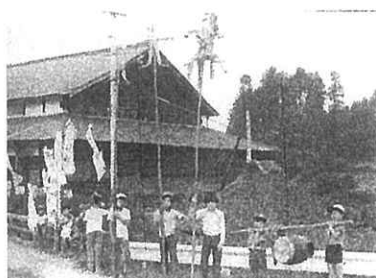
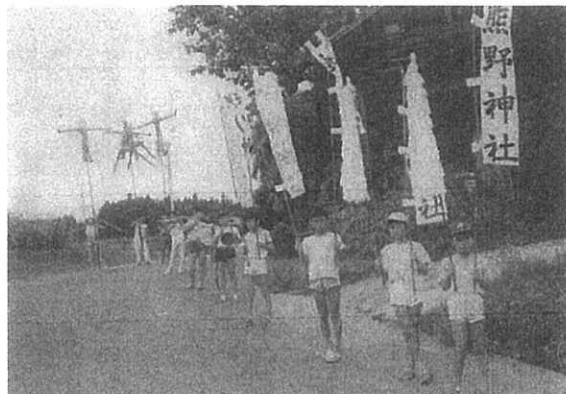
が当時の集会所（現在の薬師堂）である。薬師堂は享保5年(1720)に改修されたと記録に残っている。

その2年前の享保3年(1718)は7月に大地震に見舞われ、加えて全国的な大飢饉ききんでこの地の人々も飢餓がきと疫病えきびょうに苦しんだという。

昔は、天災とか病気が流行するのはたたりと思われていた。人々はお薬師様に、作物ができるように、病気が治るようにと一心に祈ったことだろう。

野内では、古くから津島神社の信仰がある。旧暦6月16日の深夜に愛知県津島市では、「葦よしに一切の汚れを付けて」海に流す「神葦流みよしながし」の風習がある。現在の「津島まつり」である。それになぞらえて旧暦の6月10日に家々の厄やくと疫病えきびょう、水田の病害虫へいそくを幣束へいそくに付け、麦わらで人形とともに村境まで練り歩き川に流していた。津島まつりに間に合うように神送り（虫送り）をしていたのだ。この虫送り行事は阿木地区でも多くの場所で行われていたが、戦後はほとんど見られなくなってしまった。

野内地区では、子どもたちによって麦わら人形作りが受け継がれていた。しかし、年々子どもの数が減り、平成6年(1994)からは女人禁制をあらため女子の参加も認めるなどして存続に努めてきたが、ついに平成18年(2006)行事自体が出来なくなってしまった。現在は幣束を各家に回し、老人クラブの人達が薬師堂に集まり大きな数珠じゆずを回し「ナアーマイダンボ」（「ナムアミダブツ」のこと）とって祈りを唱えている。



▲ 野内の虫送り



### (3) 藤上の念仏堂 (弘法堂)

藤上地区の念仏堂は、大正8年(1919)藤上神社の大杉伐採の際に今の場所に移転したと言われている。弘法様と観音様(子授けの観音様と言われている。)が祀<sup>まつ</sup>ってあり、今でも毎年春になると弘法様の祭りでは人々は念仏堂に集まり、1週間程お祈りを唱えている。持ちよりのご馳走や菓子を食べて、楽しんでいる。その横の森の中に藤上神社がある。

その近くの道路わきには49基の石塔<sup>せきとう</sup>があるが、この石塔は同地区内の道路改修工事の際に埋まっていたのを集めたものである。石塔を集積している場所は市内各地に見られるが、ここの石

塔は市内では他に類を見ない数の多さであり、全く分からないもの3基と庚申塔<sup>こうしんとう</sup>1基を除くと、全て念仏供養塔である。これは他地域に見られない特徴的なものである。

この念仏供養塔の年代は享保17年(1732)までさかのぼり、一番新しい供養塔は明治13年(1870)である。建てた年代に148年の時代の幅がみられるが、これらの念仏供養塔づくりが盛んに行われるのは寛延年間(1748-1750)から天保元年(1830)頃までである。藤上の念仏供養塔は、夜念仏<sup>やねんぶつ</sup>と刻まれたのが最初であり、その後、四十八夜<sup>しじゅうはちや</sup>が念仏供養塔に加わるようになった。



▲ 藤上念仏堂



▲ 藤上石塔群

### (4) その他

今回は野内と藤上の念仏堂を紹介したが、他にも調査によるとお堂としては、

野田「観音堂」・見沢「阿弥陀堂」・真原「弘法堂」

大根木「観音堂」・「萬嶽寺観音堂」・八屋砥「弘法堂」

久須田「薬師堂」・山ノ田、矢筈「弘法堂」・広岡「観音堂」

飯沼「子安寺観音堂」などがある。

[その他の寺社と信仰]

萬嶽寺・禅林寺・子安寺・長楽寺・八幡神社・風神神社・血洗神社・神明神社

庚申講・山の講・恵比寿講・御日待講・大師講・水神・涅槃会・四十八夜念仏供養

豊川稲荷・秋葉様・弘法様・先祖神・氏神・各家庭や集落ごとの神社仏閣等



## 2節 たたり

年号が「平成」となり、間もなく21世紀を迎えようという時代でもたたりを<sup>おそ</sup>怖れ<sup>ほら</sup>お祓いが行われていた。Sさんは、平成10年(1998)にC型肝炎にかかって、長いこと中津川市民病院などに入院していたが、治る気配が全くない。そこでご主人は、<sup>おんたけ</sup>御嶽さんに頼んで<sup>きとう</sup>祈禱をしてもらった。すると「畑の中にある<sup>む えんぼとけ</sup>無縁仏がたたっている」とのお告げが出た。確かに自宅そばの畑の中に、どこの誰とも分からない11基の石塔があり、Sさん宅で掃除などをして管理している。「御嶽さんは知らないはずなのにどうして・・・！」

ご主人は奥さんの全快を願い、無縁仏の供養をするとともに、自宅のわきに新しい石仏を建ててお祈りしたものだ。しかしその効果なく、翌年奥さんは逝ってしまった。

この話に限らず阿木では、「たたられた」「化かされた」「狐火を見た」などと、平成の時代に入ってからさえよく話題にしたものだ。

## 3節 五輪塔

五輪塔は一般に供養塔・墓の一種といわれ、平安時代後半頃から日本で作られるようになったとされている。

「阿木の石仏石造物」(平成9年(1994)、阿木公民館歴史教室発行)を見ると、阿木にある五輪塔が写真に収められている。場所は大野＝五輪群と不動明王の上の2か所、長楽寺薬師ヶ根五輪群、打杭、橋場クラブ地内、八屋砥弘法堂、下野田、宮田共同墓地、寺領共同墓地、寺領裏田、藤上加狭の11か所である。

このうち打杭の五輪塔については恵那市教育委員会が調査・報告をしている(「岩村城跡基礎調査報告書」平成24年(2013)発行)。それによると、旧阿木街道(阿木の人は「岩村街道」と呼ぶが、岩村の人は「阿木街道」と言う)に位置する一対の塔の一つで径10mに満たない塚の上に造塔、岡崎産の花こう岩、現高1.82m以上の大型品、17世紀末葉に岩村藩主が築造したと記している。

また「阿木の石仏石造物」には載っていないが、黒田の二基について中津川市教育委員会が調べ、「福平古墓発掘調査報告書」として昭和61年(1986)に発行している。

これによると二基とも安山岩製で高さ1m余の塚の上であり、空輪・風輪が一体になっている、江戸時代前期後半の作と推定される、としている。この五輪の塚から火葬されたとみられる人骨片が入った骨壺が出土している。骨壺は高さ13.7センチ、底径8.3センチである。なおこの五輪は空輪・風輪だけで、他の部分は欠落したものかいない。

阿木の五輪塔について市が調査したものは、他にはないそうである。

五輪塔は多くが山林や野にあるが、個人住宅の屋敷内に置かれているものもある。そのうち二基について、以下お聞きしたことを記す。

#### 橋場 三輪家

家人によれば昭和の終わり頃、近隣で作業中手足を怪我<sup>けが</sup>する事故が多発するので、祈祷してもらったところ、ある霊が手を貸してくれと言っておられるという。屋敷内にいつの時代か建立されている五輪塔を見たところ、上部がなくなっていた。附近を捜したところ、やぶ下に転がっているのを見つけた。元の位置に戻し、数年、お祈りやお祭りを行ったところ、事故が無くなったといわれている。

#### 下野田 西尾家

家人の言い伝えによれば、いつの時代か武将が傷を負い、行き倒れ死亡したため埋葬した。墓は現在1 m弱盛り上げ、小石に被われ中心に五輪塔が建立されている。昭和の終わり頃、祖父母が病気がちとなり、祈祷してもらい春と秋に丸い物を供え、供養しているという。

## 7章 阿木の伝説とこぼれ話

---

### 1節 阿木全体

#### 学校へ通う

岩村の実践女学校に通った人たちは、下駄の減るのを防ぐために打杭を超えるまでまでは、下駄を脱いで裸足で歩いたという。富田に入ると恥ずかしいので、ここから下駄をはいて通った。高校でも昭和28年(1953)頃までは男子は朴齒下駄ほうぼひたをはいていた。女子は下駄が普通だ。体育は裸足で行った。

#### 道

今のように道路は舗装でないため、赤土の泥道に苦労した。それで「野田、宮田道悪し」、「野内、赤坂道悪し」とか言われ、ひどい言葉になると「野田とぼんのくぼ（ぶんのくそとも言う。首の後ろ側のこと）を見て死にたい」などと言われ、草履をヒモに通して腰にぶら下げて歩いた。事実、足首まで埋まるような所もあった。

#### 地震

阿木では大きな地震被害があったことは伝わっていないが、濃尾地震の時、飯沼の京家坂で坂の間にある家の小便桶から小便が揺れであふれ出し、道路に流れたという。どこでも農家は小便所が家の入口に作られていた。揺れの大きかったことがわかる。被害としては、土蔵が4棟ほど倒れたと言われている。

#### ダムの話

阿木川ダムが出来るとき、補償の条件として下水道の設置が上がっていた。また、漁業組合が鮎の成長を良くするため、真原まで水を上げることを要求して、ほとんど了解されていたが、ダムの上に橋を架けるため予算がなくなり、中止された。阿木の人はおとなしいと言われた。

ダムに埋まった川筋には、かんのこ、松の木、雲の淵、野田川出会い、岩村川の出会い、猫石、大砂防、松原、などと呼ばれる鮎の絶好の釣り場があった。



## 護国神社

阿木の護国神社には戦争に召集された人、戦死をされた人の名前が800人ほど記されている。うち戦死者は200名もある。昭和13年(1938)の阿木の人口は約4,000人。そのうちの半分が男とすると、召集された人は5人に2人の割合になる。更に忠魂碑に刻まれている日清・日露戦争の従軍者を加えると、およそ1,000人近くの阿木の人々が国のためという名目で、戦争に駆り出されたことになる。

## 玉音放送があった時の感想（歴史教室で終戦の詔勅<sup>みことのり</sup>を読んだ感想）

Iさん 広岡では盆踊りの後片づけをしていたら、12時に放送を聞けという話があり、Mさんの家でラジオを聞いた。「朕<sup>ちん</sup>が、朕<sup>ちん</sup>が」だけわかった。号外を持ってきた人があり、負けたことが分かった。

Yさん 豊橋の陸軍病院で、放送を聞けという命令が出て聞いた。隊長がラジオを聞いて日本が負けたと言った。泣けるというよりびっくりして、言葉が出なかった。

Sさん 房総半島で守備をしていた。水戸の空襲があり、8月14日の夜非常呼集。海の方を向いていた大砲を、東京に向けて弾込めをした。翌朝、朝礼で玉音放送を聞けという命令が出た。あとから、放送をする、しないでもめたと言う事を聞いた。

Yさん 甲種合格で魚雷にまたがって敵艦に体当たりをする訓練で、艦に200メートル近くと海に飛び込み逃げる練習をした。夜になると練習に使った魚雷を捜した。

## 小栗千代吉さんの墓

小栗さんは明治27年9月、日清戦争に従軍し中国で戦死された。阿木で最初の戦死者。明治政府は戦意高揚のため戦死者、従軍者に手厚い待遇をするという方針だった。小栗さんも村葬で葬られ、立派な墓が建てられた。

## 三合<sup>さんごう</sup>

手賀野・東野・飯沼・阿木では、山争いが何度かあった。そのたびに山火事が起こった。話し合いでここ三合を境界とした。

## 盆の朝わざ

お盆には仏様をお祀りするが、仕事をしないで一日を過ごしていると仏様に叱られる。そのため、朝早く仏様に仕事をしていますと報告してから休んだ。

## 阿木から嫁をもらえ

昭和の時代頃までは「阿木の人をよく働くから阿木から嫁をもらえ」と周辺から言われた。「朝は朝星、夜は夜星」という言葉もあった。朝は星が出ているうちから夕方星が出るまで野良に精を出すものだという阿木の気風をあらわしたもので、勤労の風土が根付いていた。

## 2節 1分団

### 泥亀岩

飯沼にある庄屋さんのお墓のそばに大きな石があり、泥亀岩と呼ばれている。この岩に泥団子を供えると子どもの瘡かんむしの虫が収まるといわれている。

### 孫兵衛伝説

むかし、飯沼に孫兵衛さんという人が住んでいた。たいそうな金持ちで、土地を買ってはお寺に寄付したりしていたが、小作人には大変厳しい人で恨まれてもいたという。そのため長い間、孫兵衛さんの土地を耕したり、草を刈ったりすると「たたる」と言われていた。

その後、孫兵衛さんはどこかへ移住したとも、岩室に閉じ込められてなくなったとも言われているが、詳しいことはわからない。孫兵衛さんの土地は現在では、耕地整理でほとんどわからなくなっているが、今でも伝えられている場所がすこしばかり残っている。

### 大砲の話

尾張から坂本の演習場に向かう歩兵の軍隊が大砲を引きながら通過しようとした。旧道で狭く小石がゴロゴロしていて、難儀な道だったという。外戸尻坂は悪路で大砲がはまりどうにもならなくなったとき、げんろくさんが木やりを歌って音頭をとり、みんなまで引き上げた。飯沼の人たちに軍隊から感謝状が贈られた。

## 亜炭の話

阿木では野田・飯沼で亜炭が掘られた。最初に掘った人は豊橋の伝兵さんで、亜炭を熱してコークス状にして飯沼まで運び、飯沼から大井へ馬車で運んだ。このころ「炭は伝兵、金は近藤」と歌われた。近藤さんは山師で金持ちだった。亜炭は昭和27年(1952)ごろまで掘られた。亜炭を掘ったため、その後に飯沼トンネル付近の4軒の家が落盤の被害にあった。粘り強い交渉の結果、国が法律に基づいた補償をした。

## みだればし(乱橋)

乱橋は後田川と飯沼川の合流点にある現在の下沢橋のこと。この橋は阿木で最初のコンクリート橋である。

昭和初期まではバスは大井からここまでしか来られなかった。伊藤孝行さんはここからバスに乗って東京へ小僧に行ったという。橋げたになっていた大石は水害で流れたという。

戦国時代岩村城が攻められたとき、苗木城からの応援部隊がここまで来たが、岩村城落城と聞いて帰っていったという言い伝えがある。

## 天狗党の話

幕末のことだ。水戸の天狗党が中山道を攻め寄せるといので、岩村の殿様が兵と鉄砲を持った猟師を集め最初は打杭に兵を配置したが、中山道より遠いといので東野の浜井場の奥に飯沼の猟師を20人集め、兵とともに警備に着かせた。揃いのハッピを着せて一番隊・二番隊と配置した。そのためこの場所を「陣屋」というようになった。

この中の猟師の2人が大井へ様子を見に行き、天狗党に敦賀まで連れられて行かれた。天狗党が捉えられた時、2人は4日間ほど土蔵に押し込められ取調を受けたが「お前たち百姓は天狗党とは関係ないから帰れ。」と言われ、少しばかりの路銀を貰って帰ってきた。天狗党は江戸に送られ斬首された。

## ハコガネ(中尾の金毘羅さん)

この金毘羅さんを祭るため一人の人が木曾川から玉石を運んだという。初めは一人であったが途中から地区の人も手伝った。この神社には甕かめがいけてあり、甕を空けたら印籠とキセルが出てきたという。



## 鎌とぎ日

昔は化学肥料はないか、あっても高価だったので草を刈って田の肥やしにした。地区に共有の草刈り場（芝草山）があり、6月1日に一斉に山に入った。刈った草は押し鎌に長い足を付けたもので切って田に踏み込んだ。鎌とぎ日は仕事をしてはいけない日だった。

## ひじの 聖坊主の墓

飯沼新田の山の中にここで修行をしていた坊さんの墓がある。

ある時ある百姓が夕食に坊さんを招いたという。そのとき坊さんが小判をたくさん持っているのを見た百姓が殺して奪うことを考え、夜中に鎌を持って出かけた。途中で鎌を研いだいう。ここを鎌研ぎ場<sup>あつ</sup>という。殺された坊さんは篤く葬られた。

## 子安観音

昔、この観音様は千本松（山境にあった<sup>ほうきまつ</sup> 箒松。根元から幹が何本かに分かれていた。今は枯れて根だけが残っている。）にあった。山抜けで流されたが飯沼川で見つかり、宮地庄屋宅でしばらく預かってみえたが、観音堂が出来て、今のところに納められた。

## ばくち洞

飯沼新田地区の谷あいには土手が築かれ、外からは見えないようになっている。バクチは禁止されていたが隠れて行われていた。

## 血取り場の馬頭観音

血取り場というのは、馬が疲れて動けなくなったときに足から血を抜いてやる治療法があったが、その血を抜く場所のこと。真原・博打洞<sup>ぼくち ぼら</sup>・野内に残っている。飯沼の博打洞には馬頭さんが何体か祀られている。その中には馬頭さんが何体か祀られている。その中に瓦で焼かれた馬頭さんは、日露戦争の時、軍馬の武運長久を願って祀られた。



▲ 血取り場の馬頭観音三体 左が陶器製

## 狐塚古墳

飯沼地内には20余りの古墳があり、中でも宮の根・狐塚が最も多い。狐塚古墳は昭和42年(1967)に発掘調査が行われ、調査結果は中津川市史上巻に記載されている。

## 飯沼に御札が降った

飯沼の吉村家日記によると「慶應3年(1867)8月頃より諸国に神々のお札降り候よし、(中略)9月頃から名古屋のところどころに降り、町々にておおのぼせ、豊年まつりと唱え騒ぎ歩き、所々に接待あり、その様子は気違いの様だ。さらに9月末には明智に降った。10月2日、3日に岩村初めて降り、松田伊兵衛方、中野茂助方、山田五郎左衛門方、現金屋藤治方、後に松尾忠兵衛方さえお札降り、日々数多く御上へ届けた。(中略)

樋泉半左エ門方に大黒天のお札降り23日には上組藤右衛門方に秋葉さんのお札が降った。村では大騒ぎをしたという。お札が降った家では酒を出したりご馳走をふるまったりして、特に貧しい人々が『ええじゃないか、ええじゃないか』と大騒ぎをした。」という。

## ええじゃないか運動

江戸末期に日本全国に「ええじゃないか運動」がおこり、各地にお札がまかれた。しかし、阿木村では「お札」がまかれるとすぐに家を焼かれた。原因は、阿木の庄屋は運動の中心となっている人に金を出していないため。「ええじゃないか」の指導者は「赤猫をはわせるぞ(火付をする)」と明礬<sup>みょうばん</sup>で書かれたあぶり出しを使って、各地の庄屋を脅して金をまきあげた。

## 3節 2分団

### 牧野の傘岩

公会堂を建てたとき、阿木中の火の用心を願って秋葉様を祀った。秋葉山に大きな灯籠<sup>とうろう</sup>を作る予定で、木戸返りから灯籠の傘にするため、大きな石を運ぶことになった。大勢の人が出てここまで運んできたが、酒がなくなったので運ぶのをやめた。灯籠の明かりをとす部分は長い間、学校の運動場にあったが、知らぬ間になくなった。

### 三森山

三森山は神様の胞衣<sup>えな</sup>を切った鎌がご神体の山。この近くに滝があり、雨ごいに行き、鎌をここで研ぐと、たちまち雷雨があったという。アマテラス伝説の一つである。

### びょうぶ いわ 屏風岩

お産をした神様が休まれた際に、「ここは安気な所だ。」といわれ、それから「阿木」の地名が生まれたという。現在広域林道の道路端にある。

### シクラメン

この地区のシクラメン栽培は東野から始まった。恵那峡のダムを作る指導に来たアメリカ人技師の奥さん（ドイツ人）から伝えられた。阿木の夏の涼しい気候を利用して、栽培が盛んになった。一時期には全国の種子の60%以上を供給していた。

### 国鉄バス

昭和26年（1951）に中津川まで国鉄バスが通ることになった。

岩村・打杭・塞の神・橋場・寺領・藤上・広岡・手賀野・中津川駅と運行された。最初のバスが到着した時、広岡の人たちは最敬礼で迎えたという。しかし、道は狭いし路面はぬかるんだので、広岡の人たちは木を切り出して道路に敷き詰めたり、雪が降れば雪かき、バスがスリップして上がれなかったりした時には、みんなでバスを押ししたりして運行に協力した。小学生はバスに乗って登校した。しかし、分団リレーで2分団が負けるようになり、バス通学を止めようということになった。バスはその後乗客を増やすため阿木駅まで乗り入れた。

### 刀神様

恵那神社の宮司をやってみえた西尾さんが預かっていた刀を盗まれてしまった。刀が出てくることを願ってここに神様を祭った。ここにお参りすると歯痛が治ると言われている。木刀などを奉納して剣道の上達を祈る人も多い。



▲ 刀神様 今も木刀を供えている



## よきと 斧戸

ある時、龍泉寺の修理を頼まれた大工さんが道具箱を担いで上がって図面を見た。「とても自分には無理だ」と帰りかけたら坊さんが斧を研いでいた。何をしているのか聞いたところ「針を作る所だ」と言ったという。それを聞いた大工さんは、そんな大変なことをやれるなら私にも修理は出来ると思い直して寺に向ったという。後から分かったことに、この坊さんは龍泉寺の「精」だったという。

## 龍泉寺の釣鐘

武田勝頼に攻められた時、坊さんたちが釣り鐘を取られては大変と、井戸の中に投げ入れたといわれている。その井戸の場所はわかっていない。



▲ 新森岩石群



▲ 大野八幡様岩石群

## 大洪水

広岡は洪水にたびたび襲われている。例えば新森の岩、大野八幡様の裏の岩などはその名残である。大野で10メートルほど掘り下げると砂の層が3つほどあるという。高いところでも山津波があったのだろう。血洗い池は10アールもあったそうだが洪水で埋まってしまったという。

## 大野八幡神社

阿木で一番古い神社で、阿木明神ではないかと言われている。倉などがあったが水害で流されてしまった。七つのお湯建ての釜があることから、古くは盛んに信仰された神社であったと思われる。

## 土岐明神

斎藤道三に追われてここへ逃げてきた土岐氏を祀った神社。道路をまたいでその時に乗ってきた馬を祀った馬頭観音がある。

馬に乗った武将は身分の高い人だったと思われる。馬頭観音の周辺の土地をかまうとタタラレると言われる。それは馬が付けていた馬具を一緒に埋葬しているため、盗まれ

るのを防ぐことと、馬の肉をとられないようにするためと思われる。

#### 4節 3分団

##### 蛇淵じゅうぶち

風神神社のそば、阿木川に蛇淵と呼ばれる大きな淵があり、一つ目の「あまご」が住んでいた。「淵の主」とも「捕まえると目がつぶれる。」とも言われていた。このほかに2つの淵があった。

##### 源助落とし

源助というお医者さんが、雨の降る中を馬で通りがかり、土砂に巻き込まれ、馬もろとも亡くなったという。後にお地蔵さんを建てて供養した。現在の大根木、中学校の下になる。大根木はよく地滑りがおこりやすい土地である。

##### いぼ取り石

不動の林道にいぼ取り石がある。大きな石だが窪くぼみがあり、ここに溜まっている水をいぼに付けると取れるという。このようないわれがある石なので、工事の時も手を加えられなかった。

##### 蛇神様

山の田洞で仕事をしていて誤って大きな蛇を銃で撃ち殺してしまったという。その人の病気がなかなか治らなくて蛇たの祟りといわれた。祟りを恐れて4つの組の人が石碑を建て供養した。卵を供えておくと無くなってしまうという。

##### 青い石

不動川の一部に約2mほどの間、青い石があるところがあった。この石を持ってきても青い色は出なかった。今は砂防堰堤えんていで埋まってしまった。

##### 隠し小屋

武田勝頼（信玄か？）に龍泉寺が攻められたとき、大根木の人たちが隠れた岩穴を

「隠し小屋」という。大きな岩に囲まれた山の斜面にあったので、火を焚いても山の斜面に煙がはっていき、見つからなかったと言われている。大岩は水害で少し下流に流された。

## 殿様井水

明治維新のとき、藩の財産を岩村県に納めることになったが、岩村の殿様は、みんなのために使うようにと真原の新田に用水を引くようにお金を出してくれた。皆は弁当箱に水を入れたり、竹を半分に切った樋に水を入れてたりして、水平を計り用水路を作った。水平を図ることを失敗して水路を三回も作り直す苦勞をしながら、用水を作っていた。そのときの失敗の跡は今も残っている。

その後明治の中頃になって岐阜県から補助が出て、今のような水路が出来た。こうしたことから「殿様井水」とか「明治用水」と呼ぶ。久須田と真原で管理をしている。

## 5節 4分団

### 橋場と橋本

昔は阿木川には立派な橋はなく、丸木橋がほとんどだった。馬や牛は怖がって丸木橋を渡れなかったので、川の中を歩いた。渡れるところを橋場といい、そのたもとを橋本と呼んだ。

### 法印の墓

阿曾田あそだに女犯をして岩村藩から追われた坊さんの墓がある。法印は位の高い坊さんの称号。現在はパターゴルフ場の門の左側に残っている。

### ヌスト洞

八屋砥にヌスト洞という地名がある。いろいろな謂れいわがある。

その1、八屋砥で阿弥陀さんが盗まれたとき、ここに捨てられていた。

その2、阿木で泥棒をしてもここまで逃げてくれば捉えられなかった。

その3、ここに泥棒が隠れ住んでいたという説がある。

いずれにしても、用心するように警告をしたものであろう。



## やかんころがし

八屋碓の土井神様の下に、ここを通るとカランコロンとやかんを転がしたような、きみが悪い音がする所があるという。ヌスト洞に近いことからここを通る時には気を付けろという警告かもしれない。

## 乞食平こじきだいらと呼ばれる場所

どうしたわけかここには貧しい人々が集まった。あるとき殿様が通りかかり、近くの人たちに年貢をまけるからご飯を食べさせてやれと言われ、大きな釜でご飯をたいて食べさせた。今まであまり食べていないのに、急に腹いっぱい食べたので何人かが亡くなったという。その供養に五輪が建てられた。

## 塞神神社いぼの謂れと「笠島」

昔のこと。小さいころ生き別れになった兄と妹が、放浪の末にバツタリ出会いお互いを一目ぼれしてしまった。そこから阿木まで来て笠を取って一休みし、住みついた。ところが二人は兄妹だと分かり、してはいけない結婚をしたことを悔やんで自殺してしまった。

村人は二人を憐れんで造ったのが塞神神社。二人が出会った所は岩村の「相原」で、笠をとって休んだところが黒田の「笠島」だと云われている。笠島は今、国道363号線の直線の道になっている所の岩村に近い側の地名だ。

## 6節 5分団

### かみなり石

昔かみなりが落ちて石に手をつき、取れなくて苦しんでいた。それを見た青野の人々が外してやった。かみなりは感謝して、こんな親切なところへはもう落ちないと言って帰って行った。その場所は今は阿木川ダムに沈んでいるが、ダムの水が少なくなると八畳ほどの大石が出てきて、そこに手形の跡がついている。

また上流には落ちた雷を鉄鍋で煮て食べてしまったという話がある。「こんなおそがい所には、もう落ちない」と雷が言ったという。

## まんじ坂

野田と宮田との境にある旧道の坂道。寺領、橋場へ買い物や通学などに利用した道。粘土質の路面で雨の時などには難儀をした。この道を通り上田の竹やぶの中を抜けて駅に出た。

## 天神淵まで続く池

現在、阿木高校の茶畑になっている畑のそばに小さな池があった。この池は底なしと言われ、はまり込むと天神淵まで流されると言われていた。

## 7節 6分団

### 農協の工事

高い土手を掘り下げて、農協の建物を建てた土は、川を埋め立て今は畑になっている。発電所の土は川に流された。

### 池の窪<sup>くぼ</sup>

中学校の裏にあった、ギショ洞の出口に大きな天然の池があり、藤上の子ども達をはじめ多くの子ども達が魚を釣ったり泳いだりしていた。この池には <sup>はた</sup> <sup>お</sup> 機を織ることが <sup>へ</sup> 下手といわれた嫁さんが悲しんで入水自殺をしたという。それ以来、この近くを夜に通ると「トントントン、トントントン」と機を織っているような音が聞こえた。この池で死んだ嫁さんが機を織っているのだという悲しい話。

### 「寺領」のいわれ

今「寺領」と呼ばれるところは、かつては大根木の長楽寺の荘園だった地域だと言われている。

### 「本庄」のいわれ

「本庄」は、かつては荘園だったことから名づけられたとか、その昔は城があった所だとか言われている。

## 参考文献

- 「阿木のむかしと今」 阿木小学校編集 昭和56年（1981）
- 「阿木の伝統行事」 阿木高校編集 平成23年（2011）
- 「阿木の石仏石造物」 阿木歴史教室・阿木公民館編集
- 「阿木の史蹟と文化財」 阿木老人クラブ・阿木公民館編集 昭和52年（1977）
- 「ふるさとの今と昔 阿木写真集」 阿木歴史教室編集 平成5年（1993）
- 「私たちの西ちいき」 中津西地域「歴史と文化」次世代伝承委員会 平成31年（2019）
- 「図解中津川・恵那の歴史」 郷土出版社 昭和60年（1985）
- 「明知線の60年」 郷土出版社 平成8年（1996）
- 「中津川市史」 中津川市編集
- 「恵那市史」 恵那市史編纂委員会
- 「岩村町史」 岩村町史刊行委員会
- 「恵那郡史」 岐阜県恵那郡教育会
- 「年輪」 西尾ちか著 平成2年（1990）
- 「久須田遺跡発掘調査報告書」 中津川市教育委員会 平成3年（1991）
- 「笹りんどう」 中津川市立阿木高校 平成20年（2008）
- 「巖邑府史」写本 岩村町教育委員会 昭和53年（1978）
- 「2018『美濃源氏土岐氏研究講座』『武家文化歴史回廊講座』講義録」平成30年（2018）
- 「阿木騒動と橋本裕三郎」写本 阿木公民館所蔵
- 「郷土研究」 阿木中学校郷土クラブ 昭和47年（1972）
- 「岩村城跡基礎調査報告書」2 恵那市教育委員会 平成25年（2013）
- 「福平古墳発掘調査報告書」 中津川市教育委員会 昭和61年（1986）
- 「恵那神社史」復刻版 梅村馨著 平成12年（2000）
- 「阿木村『台風5号による被害の概要』」 阿木公民館所蔵
- 「広報なかつがわ」 中津川市
- 「古地図で楽しむ岐阜 美濃飛驒」 風媒社 平成27年（2015）
- 「ゼンリン住宅地図」
- 「岩村城」 恵那市生涯学習課 平成29年（2017）
- 「阿木の文化遺産」 阿木地域伝統文化継承事業実行委員会 平成29年（2017）
- 「阿木地区の今昔」 阿木公民館所蔵
- 「野内の信仰」 吉村 雅己著 平成24年（2012）



## あ と が き

---

阿木地域は、日本各所の農村地域と同様、社会環境の変化や価値観の多様性、過疎少子化に伴う人口減少など、受け継がれてきた地域文化を次世代に継承することが難しくなっています。

その中で、平成28年(2016)9月に設立された阿木地域伝統文化継承事業実行委員会は、平成29年(2017)には文化遺産冊子、民話冊子、文化遺産マップ、文化遺産説明看板等を作成しました。平成30年(2018)にはあぎ郷土かるたの作成を行い、令和元年度には本書、阿木の生活文化集を発行することができました。これは文化庁の文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)をいただくことで可能になったものです。

地域の住民の記憶も薄れつつある中、今の時点での過去の地域の生活様式、すなわち「生活文化」を記録に残していくことにより、次世代に生きる方々が、この地域の活性化とコミュニケーションづくりに役立つものと期待しています。

本書執筆にあたり、多くの皆様のご協力をいただきここに深く感謝し、御礼を申し上げます。

執筆者

【五十音順】

片桐光朗 中神啓克 花田美晴

本多敬穂 三宅秀雄 渡邊和義

【事務局】

阿木地域伝統文化継承事業実行委員会

阿木公民館

阿木の縦糸横糸 -生活文化集-

発行日	令和2年(2020)3月13日
発行所	中津川市文化遺産活用実行委員会 (阿木地域伝統文化継承事業実行委員会) 〒509-7321 岐阜県中津川市阿木33番地 阿木公民館内 ☎(0573)63-2001 FAX(0573)73-0001 E-mail agi-office@city.nakatsugawa.lg.jp
印刷所	株式会社 協和印刷工業 〒508-0001 岐阜県中津川市中津川2190-1 ☎(0573)66-3788